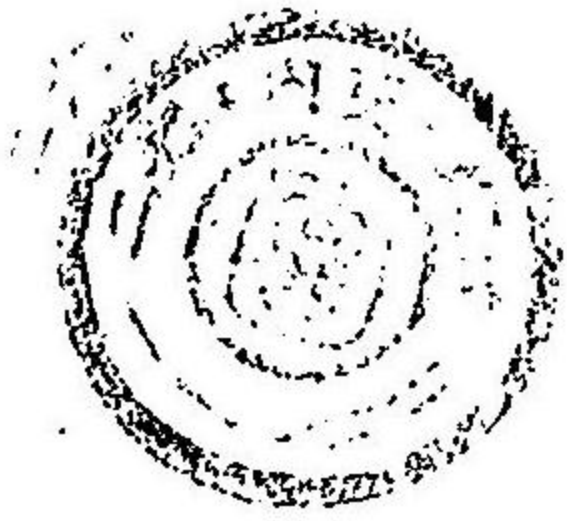


文學士三宅雄二郎著

哲學通論

完



東京

文海堂發行

序

祖考弱冠にして業を山陽先生の門に受けしが北歸す
 るふ當たり先生水哉亭の三字を書し鳴水西崖即目の
 詩に并せて贈られき蓋し居の犀水に臨み激澗たる清
 流を目下に瞰るを聞かれてなり先君居を移し水を
 距る遠かりとも依然として擘間に掲げ惟へらく先生
 の意必しも水の有無を問はざるなりと嗚呼余奚ぞ獨
 り水徳の大なるを忘れんや唯だ之を誤認せんを憂
 ふるのみ寧ろ沛乎として蛟龍に従はんか將た肅然と
 して幽淵に落ちんか寧ろ雲遊水行空を觀念せんか將

た落花流水情に牽引せんか寧ろ黄河の濁流と爲りて
自尊の徒を溺さんか將た約斷の碧水と爲りて罪愆の
民を洗はんか傳へ道ふ泰西哲學の始祖ダーレスは詩
仙と同一く水を以て宇宙の原理と爲せりと果して然
らは幾くも余の陳述せる所之が涓滴たらんを其の
寂々焉として消散し去るか沌々焉として奔騰し來る
か知るべきに非ざるなり

明治二十二年九月

著者識

凡例

- 一 本書は多く材料をシコウグレル、クノー、フ井セル二氏の著書に取れり。然れども他人の所説を用ゐしと無きにあらず。又た著者自ら判断を下せしと無きにあらず。
- 一 論評に係る部分は總べて著者自身の文辭なれども、單に學説を叙述する所の往々他に筆記を依頼せしとある爲め、措辭用語の相ひ整合せざる莫きを保せず。但だ責任は著者の甘んじて受くる所なり。
- 一 著者の名は廣く世間に知られざるが故に、畏友の評言を卷末に附し以て發行廣告の手段と爲せり。卑陋と呼ばるゝも、誦觚と名けらるゝも、敢て辭するを得ず。

目次

第一部 緒論

第一章	進學解	一
第二章	哲學の愉快	八
第三章	何物ぞ是れ恰好の哲學	一八
第四章	東洋哲學と西洋哲學	二五
第五章	西洋哲學の變遷を通覽 し來る	三七

第二部 獨斷法の哲學

第一篇 經驗派

第一章 ベーコンの學說

一	五
	二
	丁

第二章	ホッブスの學說	二
第三章	ロックスの學說	五九丁
第四章	佛國革新時代の學說	六七丁
第二篇	推想派	七五丁

第一章	デカルトの學說	八七丁
第二章	スピノザの學說	一〇四丁
第三章	ライブニッツの學說	一一四丁
第四章	獨國革新時代の學說	一三〇丁

第三部 懷疑法の哲學

第一章	懷疑の媒介	一三二丁
第二章	ヒュームの學說	一三七丁

第四部 批判法の哲學

第一篇 超絶的

第一章	カント	一四三丁
第二章	純粹道理批判	一五〇丁
第三章	實踐道理批判	一八〇丁
第四章	斷定批判	一九四丁

第二篇 主觀的及ひ客觀的

第一章	フヒテの學說	二〇八丁
第二章	シェリングの學說	二二〇丁

第三篇 純全的

第一章	ヘーゲル	二三一丁
-----	------	------

第二章	理法學	二三九丁
第三章	萬有哲學	二五八丁
第四章	精神哲學附結論	二六〇丁

四

哲學涓滴

三宅雄次郎著

第一部 緒論

第一章 進學解

洛陽少年往々にして奇警の語あり、貪夫は財に徇ひ、烈士は名に徇ひ、夸者、權に死し、衆庶は生を馮むと言へるは、豈に人事の適評に非ずや。錢に鳥目に白水堵物、南無金銀七福神、寶船を視せ、珊瑚の層々たるを羨み、鐘聲を聽て泉貨の縱々たるを想ひ、累積し累積して、漸く死期に逼まり、虚空を攫み絶叫して猶ほ瞑目し得ざるもの、鮮少なりとせんや。念ふべきものは身よりも名なりけり、名は末代の人の世の中、孔子

№ 2324

第一 部 緒 論

も世を没して名の稱せられざるを疾み、魏の文帝も生きて七尺の形、死して一棺の土、唯だ名を揚げて去る朽ちざるべきと宣ひしが、實に名を擧げ名を傳ふる爲め、何の危険か冒す可らざらんと覺悟するもの、鮮少ありとせんや。驕るもの久しからずといふなれど驕らぬものも夢の世といふ、宜く事を行ふ確々落々日月の皎然たる如くすべしと決意する者、鮮少なりとせんや。世の中は喰ふてはこして寝て起きてさてその末は無茶苦茶となる、飲めうたへ一寸先は闇の夜と強て宴遊を試るもの、鮮少なりとせんや。嗟呼奚る鮮少なりとせん。滔々たる天下是れ此徒輩の喧囂奔狂に外ならず。」然り貧夫、烈士、夸者、衆庶、老や、弱や、簇々として原野烟叢の草艸に彷彿たり。坐に問ふ、皆な能く人生究竟の目的に適合し

第一 部 緒 論

居るか。富豪は能士の尊敬する所、美人の圍繞する所、進て意の如く、退て意の如く、如意珠を懷て龍王城に降下するに譲らずして、愉たり、快たり、觀樂を極むるに似たれども、思へば能士の尊敬、美人の圍繞も、富豪其人を尊敬し、其人を圍繞するに非ずして、富豪其物を尊敬し、其物を圍繞するに止まり、其物を蠶喰し了れば、啻に其人の艱厄を痛歎せざるのみならず、進て之を死地に陥落するとさへ有れば、雍々たる歡樂を極むるも、夢裡假空の歡樂にて、俳優の舞臺に瓊筵を催ふすに異ならず。無生物の金銅を崇拜し、虛妄的の快樂に貪着し、自ら以て至幸の人たりとするは、老婆の偶像に敬禮して、極樂往生疑ひなしと憑信するに劣らざらんや。況んや慳吝是れ性とし、守錢是れ事とし、吝嗇けちん坊、貨幣の中に起臥

第 一 部 緒 論

するに至ては、嶺山の巖窟に投して餓鬼の所行を倣ふに違はんや。豹死して皮を留め、人死して名を留む。忠臣の奸邪を除き、節士の大難に斃るゝ、芳名を永遠に傳ふるやに思はるれど、星移り物換り、世々代々數十百千の忠臣節士を輩出するに於ては、墓表なく、碑石なく、姓名を記憶する者なく、事蹟を稱揚する者なく、幽谷の樵叟獵夫、曠野の蚊蚋蜂蝶と均しく永く凋落堙滅に歸し終らん。烈士や、義人や、仁者や、英傑や、神武東征以來藤原に源平に北條足利に屈指するに違わらざるべく、支那に印度に希臘に羅馬に英に佛に獨に米は一層屈指するに苦むへく、之を詳悉するは強記博覽の史家といへども至難とする事にして、史家の知る所の僅少なる部類すら、概すれば超群の偉人たるより、寧ろ機運にて溢

第 一 部 緒 論

美の賞賛を博し得たるものとす。人の憂患を分ち、身を捨て、他を救ふもの、何ぞ故さらば秘密の事情を告白せん。得失顛倒するに幾けれども、名譽と道義と極めて並立し難くして、名譽を發揚せんと欲せば、道義を固守する能はずして、道義を固守せんと欲せば、名譽を發揚する能はざるの傾向あるを奈何せん。惡漢にして美名を有し、賢士にして蒙蔽に屬するもの、勝へて數ふべからず。眞に傳はるや、傳はらざるや、顯滅の測りがたき浮雲の名聲の爲め、狂雷を叱し北斗を睨して、焦心苦慮するは、夏日蛺蝶の明燈を繞りて紛飛するに像似せざらんや。轉して官府商會を觀るに、人多くは有用の材たらんことを期し、やくにたつ、職務に當る、大任に堪ふる、と稱せられて、揚々として得色を顯はすを常とするが、此事

や果して揚々として得色を顯はすに足るか、感なしとせす。考察せよ、是れ活々たる精靈の存在を忘却する者にあらざるか。考察せよ、郵便配夫何ほと疾走するも、電信電話に先するなくして、擊劍師何ほと健闘するも、銃丸砲彈に勝つなきに非ずや。禁城の玉輦をして驕々として九陌を通過せしむるの職務に當たるは、人たらずして、牛馬たるに非ずや。億萬の蒼生をして陶然として飲食し、安然として住居せしむるの大任に堪ふるは、人たらずして、陸土たるに非ずや。唯だ使はれんとし、用ゐられんとし、機械的に運動するを辭せざらんには、時に或は頑鈍無知なる禽獸瓦石の下位に落ちん。噫嘻朝に夕に孜々營々として黽勉苦勞するは、必竟何の爲に然るか。

第一 部 緒 論

嗚呼吾人胡爲ぞ茲に在るや。東を望むに浩々乎として界限なく、西を眺むるも浩々乎として界限なく、往に溯るに超々乎として究極なく、來を推すも超々乎として究極なし。此の無限の寰宇無究の世代に暫く微々たる蠢動を爲すは、抑も何の目的あるか。豈に生まるゝや偶然にして、蠢爾たる鳥獸と俱に果肉の厚味を嗜み、樹影に謳曲を謠ふに停まるか。將た顯はるゝや必然にして、遍在の聖靈と共に造化の妙趣を感じ、乾坤の宏壯を欽し得るか。一客大江の上に歎して曰へらく、飽樽を擧げて相屬し、蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟、吾生の須臾なるを哀み、長江の無究なるを羨むと。歎べきか、歎すべからざるか。想ふに人の無盡なると、纔に水の逝て往かず、月の盈虚して消長する莫きが如く、あらざる。

第一 部 緒 論

し。易學と云ひ、知學と云ひ、理學と云ひ、哲學と云ふ、其玄を鉤り、其深を探らば、大道自ら坦然たらん。復た奚ぞ遺響を悲回に記せん。孤鶴靈然として長鳴せば、寶籙を取て丹爐に抛せんのみ。

第二章 哲學の愉快

春風習々として景象熙和あるの日、筇を曳きて野圃の中に漫歩徜徉するは、愉快の事あるべし。然るに植物學を修め、行く行く路傍の翠葉繁花を探究するを得ば、更に愉快を覺へん。秋月皎々として一天雲翳なきの夜、舟を泛へて滄溟の間に把杯浩歌するは、愉快の事なるべし。然るに天文學を修め、嘯吟の際に大空の珠斗列宿を稽查するを得ば、特に愉快を感せん。遺跡を尋ぬるも愉快なり、異郷に赴くも愉快なりと

第一部 緒論

雖も、若し平生人類學を修め、社會學を修め居らば、敗寺に入り、碑銘を讀み、宮殿に入り、音樂を聞き、世人の風俗習慣を察し、國家の制度格率を考ふるに當り、一層太多の愉快を承接するあらん。化學にせよ、醫學にせよ、將た又た地質學にせよ、物理學にせよ、博言學にせよ、理財學にせよ、凡そ學術は人を學に至ては、行く所として愉快ならざる無く、止まる所として愉快ならざる無く、事變に遭遇して愉快を享けざる無く、思慮を焦盡して愉快を受けざる無からしむるなり。旅中風雨の爲め船舶の便を失ひ、空しく驛舎に滯留せざる可らざるどき、往を懷ひ來を推し、寰宇の紛事を考察して、喜憂交も發出するに及ては、絶へて無聊に苦むとなし。久く病床に臥

第一 部 緒 論

し、脛弱く食減し、起きんと欲して起きられず、眠らんと欲して眠られず、心緒亂れて麻の如くならんとするとき、坐に心意微妙の作用を思惟し來れば、飄然として虚を歩し玉を喰ひ仙子の貝闕に遊ぶに像似すべし、事成らずして獄裡に呻吟し、飛雪霏々、厲風淅々、首縮まり、手龜まり、爲さん所を知らず、落拓極りて猛氣生し、將に凍髭を奮ひ、鉄拳を固め、一隅を睨みて大聲疾呼せんとするとき、自ら胸を打ち、悠然として萬有の顯出を惟ひ、思想の轉化を考へ、身を蒼空の中心に置くに於ては、恨みに恨める宰相の專横探偵の詭詐志士の懦弱典獄の苛刻も泡沫と均しく次第に消滅し去るあり。死に頻するも傷むことなし。プルーノ自説を曲けずして死刑に處せらるゝや、判事に向て曰く、爾は予よりも戰栗せんと、言

第一 部 緒 論

ひ終りて、泰然烈火を被りて殞命せり。其心を推すに、天地を窮め、萬世に渉るもの有らんか。復た何の苦痛か之れ覺へん。苦痛の滅殺する實に斯の如くなるが、而も快樂は却て増殖するこそ面白けれ。古池に蛙が飛ひ込むとて常人は見向きもせざれど、芭蕉翁なりせば絶妙ありと感賞せん。明月は年々十餘回現出する筈にて、毫も珍奇となすに足らざるも、李白なりせば青天有月來幾時と呼ひ、自ら問ひ自ら答へて、感慨措く能はざらん。哲學士も亦た之に類する所あり。裁々たる山嶽、漫々たる湖海、填々たる雷霆、閃々たる電光、飛ぶ螢、落つる葉、得意の演説、自惚の端歌、威勢を顯はさんとする文盲、役人、才氣を示めさんとする馬鹿野郎、皆な精爽なる注意を喚ひ起こし、或は蕭然として沈思するの因と爲り、或は嗛然

として大笑するの種となり、昨に比し、明を推し、前に聯ね、後
 を顯はし、無量の興味を感發し來るなり。鳳笛の鳴々として
 響き、瑤琴の瑟瑟として鳴るを聞けば、石を裂き雲を穿ち玄
 鶴を舞はし白鷗を翔けしむるの理想あり。紅顔花の如き少
 年のあどけなく笑ひ、嬌容嫵娜たる麗人の妙へにやさしく
 歌舞するを視れば、神使を屑霄より呼ひ降たし、菩薩を兜率
 より招き寄するの觀念あり。豈に眼前に快暢を覺ふるのみ
 ならんや。事小ありと雖も、天地の妙趣に協ひ、一動直に六合
 を貫通するもの有るを知るは、哲學士も詩人も同様にして、
 時に或は哲學士の詩人に超越する事あり。蓋し詩人は多く
 感情の境界に踟躕するも、哲學士は渺漫たる思想を縦横に
 遍遊し得ればあり。唯其れ然り、故に哲學士の眼を閉ぢて冥

此ト摩訶
 多クは
 ノミテ
 論

第一 部 緒 論

想し、精神を脹大し、宇宙と合同し、聖靈に比擬し、上帝に接近
 するに及ては、愉快の無限無邊なると、傍人の思議すべき所
 に非ざるなり。
 且つ夫れ人の苦難は自家の境遇を誤解するに基くと少し
 とせず。萩の前原佐賀の江藤が膽力に富むに拘らず、刑に臨
 み慘々として落涙せしは何に由るか。結果の意外に出でし
 に由るに非ずや、意の如く成さんとして意の如く成らざる
 は、残念に堪へざる事にして、残念に思はざるは、無智の勇士
 に外ならざるべきも、而も事既に去るに及て、猶は悔恨して
 已まざるは、無益の苦痛を感受するに違ふをし。老西郷に於
 ては、敵軍の重圍に陥り、砲聲耳に徹し、榴彈前に裂くるも、從
 容として談笑し、盡日洞中棋響閑の吟あり。何等の餘裕ぞや。

論 緒 部 一 第

磊々たる意想は前年大総督參謀として東海道に進み開東
 奥羽を震動せる時に異ならず。胸中曾て一點の苦楚なし。羨
 まざるべけんや。貿易の大權を握り、一舉手十萬金を獲、一投
 足二十萬金を博し、陰然王侯に擬するは、快は則ち快ありと
 雖も、一朝機を誤りて顧客の信用を失ひ、商賈の蔑視を受く
 るや、周章狼狽、策を出すと愈々多くして愈々拙く、深夜人定
 り鼠騒き、獨り燈火に對して、帳面を披き算盤を彈き、伏して
 焦慮し、仰て歎息し、吁彼れ紙幣（紙幣）の鑄造（鑄造）を勸めながら、此事に
 就て冷淡を極むるは何故ぞ。吁彼れ山林の拂下を約しなが
 ら、之を聞て面會を謝絶するは何故ぞ。卑劣なり、否な我も卑
 劣なり。輕薄なり、否な我も輕薄なり。狡猾なるか。貪婪なるか。
 噫嘻人事の特むへからざる此の如きものあるか。寧ろ梧一

論 緒 部 一 第

に倣て短銃を執らんか。將た紀文を學て乞兒と爲らんか。一
 悲去りて一憂出て、一悶往て一愁來り、頭痛み眼暈み、髮抜け
 牀瘦せ、徒に婢を叱し奴を罵り、叫喊嗟訝して生氣を斷つに
 至るは、目して焦熱地獄に煩悶する者となすべからざるか。
 要するに身の能力を察せず、盈を知て昃を知らず、顛蒙より
 して暗鬼に呵責せらるゝに過ぎざるあり。怨むべからざる
 に怨み、憤るべからざるに憤り、心中一日の安寧を得ざるは、
 抑も復た不幸の生命と謂はざるへけんや。毀譽得失に拘泥
 せず、死生の間に談笑するは、性質の然らしむる所なりと雖
 も、人爲の作用にて輒く茲に到達するは、蓋し哲學を修行す
 るに在り。哲學の修行焉を愉快ならざらんや。哲學を修行す
 るとて、必しも一室に閉居するに及はず、教育に従事するも

可あり、醫務に黽勉するも可あり、殖産に奮勵するも可あり、政事に奔馳するも可なり。專業の餘暇に之を修行せば、幾くは一たび成功して意氣猛く、一たび蹶蹶して肝膽落つるの弊風を免れんか。實に哲學は所謂浩然の氣を養ふ者、之を練り之を磨かば、尋常の中に寓して天地の間に塞かり、卒然として之に遇へば、王公も其貴を失ひ、晋楚も其富を失ひ、良平も其智を失ひ、賁育も其勇を失ひ、儀秦も其辨を失ふならん。

第三章 何物ぞ是れ恰好の哲學

尋常の中に寓して天地の間に塞かる者は哲學あり。之を喻へば、其れ猶ホ南海の怪物の如きか。渠れ窮涸して獼獼の笑と爲るも、忽ち變して日月に薄り、光景を伏し、下土を氷にし、陵谷を汨すとあり。哲學は無益なり迂腐なりと云はるゝも、

第一部 緒論

焉ぞ知らん名士をして高山仰止景行行止雖不能至然心嚮往之の歎あらしめざるを。哲學は其れ亦た如來の掌の如きか。悟空の天宮を乱すや、如來之に言て曰く、汝能く我掌に登りて脱するを得るやと。悟空大笑して言へらく、愚なるかな、我れ通力八十萬里を飛行す、汝の掌中を脱する易々のみと。直に掌に躍り上り、白雲を起し飛行する八九萬里、豎立せる大柱に齊天大聖到此一遊と書し、雲を飛て歸り來れば、依然として掌の内に在り、遂に五行山下に押し入れられ、鉄丸を喰ひ銅汁を飲まざる能はざるに至り、提くる所の如意棒上は三十三天に達し、下は十八層地獄に及ぶも、些少の用を爲さざりき。浮薄の徒才を恃み藝に誇り、哲學の虛妄を説くも、一旦議論して駁撃せらるれば、忸怩慄慄して退くべきに

論 緒 部 一 第

非ずや。哲學は復た電氣に類する所あり。電氣は輝きて靈華と爲り、鳴りて霹靂と爲り、線を通して音信を瞬息に達し、輪を轉して裝貨を遙遠に運び、或は良劑効驗なきの疾病を治し、或は手工製作しがたきの印刻を成し、又た或は連檣襲撃し來るとき、俄然一發激浪の間に打沈し、陽に、陰に、無量の作用を現はし出すが、哲學も多様の働作を爲し、時に孔子の如く歴代の帝王を教誨し、時に釋尊の如く凡世の衆生を濟度し、時にアリスタートルの如く精細の道理を闡世踈狂の僧侶に授け、時にフヒテの如く人心を喚起して敵國の暴威を挫き、時にルーソーの如く累代の汚穢を掃除して、邪まある迂吏の肝膽を破り、飽くなき貪夫の利眼を眩ますなり。事の濫用は免れ難く、世人の電氣に大用あるを聞きしとき、一も

論 緒 部 一 第

二もなく電氣の力に歸し、奇怪の事あれば電氣なりとし、知るべからざる物あれば電氣なりとし、地震も電氣なり、催眠術も電氣なり、男女相ひ眷戀するも電氣なりとせしと同じく、哲學の名目をも妄りに使用し、小理窟を並ぶれば哲學の談とし、常人の憚るへき猥褻の事實を説きて哲學的の議論とし、洒落哲學、色情哲學、處世哲學、變哲學を以て哲學の種類と心得るあり。奈何に便利が勝を制すればとて、エレキの一語能く疑惑を決し、哲學の一語亦た少くも明けて通ふさるゝ風あるは、奇なりと謂ふべし。然れども廣く使はるゝは、事の大なるを示すにせよ、瑣屑の事に應用せらるゝ丈け、眞價を遮蔽せらるゝものにして、哲學の譏笑せらるゝも、斯學の輒く理會せられざるに依ると雖も、抑も復た戲謔玩弄の物件

に適應せらるゝに因らずんはあらず。彼の怪物は獐獏の笑ふが如き者にあらず。哲學豈に市井に云々するが如く爲らんや。ゲル英人の所謂哲學を嘲て曰く、是れ勞働者の仕事にして、哲學を去る遠しと。若し邦人の稱する所の哲學を看バ、將た何様の評語を下さんか。

物は見へやすく思はれて、却て見へがたきあり。眼に最も近きは睫あれども、絶へて之を視ると無く、吾人の接觸する所にて最も濶大なるは地球あれども、決して之を觀るを得ず。大陽赫々として照耀するも、其の大地に百四十萬倍するを知るもの、衆多なりとするか。列宿炳々として輝煌するも、中に光線の五百萬年を経過し來るあるを認むるもの、衆多ありとするが。哲學の關するところ至大至廣、在らざる所なく、

第一 部 緒 論

第一 部 緒 論

通せざる所あきも、此を辨識するには、多少の學習を要し、多少の修練を要するなり。渠れ怪物も雲なくして靈を神にする能はず。渠れ如來も五時に依らずして妙法を示す能はず。電氣學亦た原より着々として次第のある有り。哲學奚ぞ茫茫然とし統合する莫く、邈々焉として確定する莫からんや。必ず一定の順序に隨ひ、若干の書類を讀すんばあらず。但し其主旨の自ら理を尋究するに在るが爲め、諸大家の意見を稽查するに至らずして、沈思鈎深能く奥妙幽邃の事理を達觀し得ると無しとせず。新に一派を開くもの、概ね學識に乏くして、ホップスの如きは、若し予にして他人と均しく書物を讀みしからば、必ず他人と均しく無學ならん、と迄で言ひ放ちしかども、而も今日のやうに學理の精密なる世代には、是

非とも先輩の議論に就て研究する所なきを得ずして、教外別傳を言ひ、不立文字を稱すれば、恐くは懶惰者流の良口實と成り果てん。抑も哲學といふ語は、今や普通の詞辭と爲り、商賈まで哲學々々と罵るも、實は明治十年四月東京大學の文學部の一科の名として使はれしより流行せる者にして、別に理學とも知學とも究理學とも致知學とも呼ばれたるとあれども、元來名目の存在せざるのみならず、之に類似せる學問すら殆ど全く世間に流布せざりしと斷言して可なり。我國人民當今去る理論を嗜好する様に見ゆれ、古來偏へに感覺的の事物を貴びて、絶へて思想を高遠に驚する莫く、菅江諸家も、徳川氏の諸儒も、多くは詩文の編作、經書の註説に従事し、經書の註説とても、主に字句を解釋し、古語を引用

第一 部 緒 論

第一 部 緒 論

し、強記博覽讀み得ざる無きを誇れるのみにして、強て哲學の一種を考究せし者を擧れば、伊藤仁齋を除き、僧侶の一部分と中江熊澤大鹽の如く王陽明の良知學を奉せる徒輩に過ぎざりしならん。要するに哲學は曾て學問として存立するに及はざりき。嗟吁哲學の語既に盛行するも、近く十年前に始れるのみ。世人は之を以て何物とするか。論理學心理學とせざれば、佛説の類なり、性命の談論なり、とするならんか。論理心理の二學哲學と密接の關係あるにせよ、直に之を指して哲學と名くる能はざるべく、釋氏の教義、宗明儒士の性理論動もすれば純全たる哲學と爲すを得るにせよ、從來の解説にては、遽に目して哲學の稱を附する能はざるべし。茲に思へよ、單に哲學と云ふは、純正哲學の謂にして、ユール

第一 部 緒 論

ウヰの定義を下して、原理の學と爲せる者にして、之を學んには、唯だ近世の西洋哲學を通曉するより外あらず。東洋哲學は高尚の道理に富みて、西洋哲學と等しく考究するの價格あるも、解説の方法宜きを失ふより、討究の際恍惚として徬徨する無きにあらざれば、若し志の存するに於ては、先づ彼の哲學を尋繹し來て、此の哲學に妥當の規則を應用し、至理を開發して世界の學事社會を裨益するを務め、尙ほ得べくんば自ら一機軸を出して、此學の發達を助成すべきあり。然れども是れ奚ぞ一朝にして成らんや。蒙古の土地浩々乎として平沙垠なきも、尙ほ道路の依るべき無しとせず。禹は聖人と稱し聖人は韓愈が之れあくんば人の類滅する久しと唱へし者あるが、其の洪水を治むるや、陸行車に乗り、水

第一 部 緒 論

行船に乗り、泥行楫に乗り、山行楫に乗りざるを得ざりしと云ふ。順序や重んぜざる可けんや。近世の西洋哲學は寔に微妙の寰區に進入するの階梯にして、一段を後にし、一段を前にし、段々登上すれば、杳々たる層霄に達すると、猶ほ南海の怪物が茫洋として玄間を窮むる如くならんか。嗚呼循々として順序を履み、而して盈々として乾坤に滿つるは、即ち眞に尋常の中に寓して天地の間に塞かるに非ずや。

第四章 東洋哲學と西洋哲學

東洋といひ西洋といへば、優劣自ら判然たるが如なれども、マルコ、ポロの元の世祖に仕へし時は、恐くは東洋を以て西洋に超越すと爲せしからん。一層前代に遡りて秦に到り周に到れば、他邦に優れると炳々として明なり。闔世の歐洲は

第一 部 緒 論

如何に有りしか。有名なる希臘の繁華、稱するに足らざるに非すと雖も、其れ能く周の郁々乎たる文化に若かんや。印度亦た時ありて世界に冠絶せしからん。松栢摧けて薪となり、桑田變して海と成る。羅馬人隱匿してチュートン種の光顯あり。西班牙や、英國に必勝艦隊を遣はせしも、須臾に凋落して隣邦の憐憫を乞ひ、露西亞や、蒙古の爲め苛刻の抑制を受けしも、勃然興起して宇内各國を囊括せんとす。一盛一衰は自然の勢のみ。盛あれば貴ばれ、衰ふれば賤まる。勝てば官軍。負ければ賊。チー將軍百戦功を奏して國威を輝かせしも、ワールローの一敗空く賊名を負ふて死刑に處せられたり。一個人も然り、集合体も然り。嗟吁東洋果して永く下劣を甘んじて、西洋果して常に秀優を誇るか。時あり、勢あり、資質奚を

第一 部 緒 論

異からん。頭蓋の廣濶必しも稱すべきに非ずして腦質の緻密なるは容量の大太なるに勝らん。身体の長大必しも賞すへきに非ずして、心力の競争のため多量の滋養を手足に送らざれば、軀幹漸次に短矮となり纖少とならん。毛色の差違遂に何する者ぞ。人種の高下を辨するは、重もに成敗興亡に由るものにして、ヒポクラテスが支那に行きしからんには、或は漆髮黒眼を高等の表號と爲せしやも知るへからず。假令自己の種族を卑下するを嫌ふより、他を高等とするに及ばざるも、決して下等の稱を附する能はざりしなるべし。東洋衰頽すと雖も、何そ久遠に西洋の下位に列せんや。况んや東洋にても、印度人の如く、波斯人の如く、純粹のコーカシヤン種ありて、之を輕侮するは西洋の種族を卑下すると同様

なるに於てねや。洋を兩分して、一概に東を抑へ、西を揚くるは、實に當を得ざるとなり。

第一 部 緒 論

東洋哲學は支那印度波斯猶太埃及等に關し、西洋哲學は希臘羅馬英倫獨逸佛蘭西伊太利等と關するが、東洋にて最も重要あるは儒道佛の三教にして、西洋各派の學理に拮抗するに不足なしとす。孔子は輒く性と天道とを言はざりしも、其述作と稱する繫辭傳は、玄奧冥渺思議すべからざる者あり。天一地二天三地四天五地六天七地八天九地、天數五地數五五位相得而各有合、天數二十有五地數三十凡天地之數五十有五此所以成變化而行鬼神也と云ふは、ピタゴラス學派の一をアポロとし、二を爭鬪とし、三を正義とし、三十六を宇宙とするより理を穿てるに似たり。子思の天命之謂性率性

第一 部 緒 論

之謂道脩道之謂教と云ひ、孟子の盡其心者知其性矣知其性則知天矣と云ひ、荀子の人何以知道曰心心何以知曰虛一而靜と云へるは、思想に係る識見の卓越あるを證へし。荀子の心者形之君也而神明之主也出令而無所受令自禁也自使也。自奪也自取也自行也自止也と云るは、自由意志論の要領を發揮せるものと爲さるるを得ず。宋に及ては理論頗る精微にして、程子の心也有指体而言者寂然不動是也有指用而言者感而遂通天下之故是也惟觀其所見如何耳と云ひ、朱子の明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具衆理而應萬事者也但爲氣稟所拘人欲所蔽則有時而昏然其本体之明則有未嘗息者と云へるが如きは、觀想し得て妙と稱すべし。明の王陽明に至ては、直にヘーゲルに對比すべくして、心則理也天下又

第一 部 緒 論

有心外之事、心外之理乎と云ひ、吾心之良知即所謂天理也。致吾心良知之天理於事々物々、則事々物々皆得其理矣。夫學問思辨篤行之功、雖其困勉至於人一己百、而擴充之極、至於盡性知天、亦不過致吾心之良知而已。良知之外、豈復有加於毫末乎と云へるは、理法を領得し來て純全精神の極處に到達するに異ならず。道教は概ね詭幼ゴウゴウなれども、一方に新プラトネウプラト、若くはスピノザと對抗し、又一方にアンドレーの想像に出て、ライブニッツをも誘引せるロシクルシアン會を凌駕する狀あり。佛教は玄深奧妙、事法界より事々無碍法界に入る所、一念に千載の哲學歴史を經過して、絶對の境域を包擧するなり。何の道理か其上に出てん。

斯く東洋哲學は西洋哲學に對合するを得れども、而も從來此

第一 部 緒 論

を修練する者、絶て學理として考究する無く、一議一論祖師の言語を注釋するに止まりしより、今日偶々東洋哲學と稱して解説し始れば、古人の腐説を討究する茶ずきの好事家と思ふなり。有て無きは、東洋哲學ならん。試に碩儒に問へ、如何にして孔孟の意見を窺ふべきかと。彼れ必ず經書を講究すべしと言はん。試に道士に問へ、如何にして老子の志望を察すれべきかと。彼れ必ず真經を閱讀すべしと言はん。試に高僧に問へ、如何にして釋迦牟尼の教義を知るべきかと。彼れ必ず浩漭の典籍を通覽すべしと言はん。研究の爲には、經書を講究する可なり、真經を閱讀するも可なり、浩漭の典籍を通覽するも可あり、否ち是れ爲さざる可からざる事なりと雖も、唯だ奈何せん、章を追ひ句を尋ぬるに、疑惑百出、解し

第一 部 緒 論

難く、曉り難く、全体の旨義安くに在るを判別する能はずして、之を質問すれば、字彙的に答辨し、二三の語句を反覆して説明し、愈々問へば、愈々錯雜し、遂に茫乎として理會すべからざるに至るなり。良し、聖賢の主旨は一朝に解説し得ざるにせよ、周子の無極而太極の類は、嘗に通曉せざるのみならず、之に通曉せざるを以て、正道に協合するとなし、小乘大乘の事實上の變遷も、單に詳悉せざるのみならず、之を詳悉せざるを以て、悟道に適應するを爲すこと、驚くに堪へたり。君子は道を行ふのみ、窮理何かせん。僧侶は衆生を濟度するのみ、歴史の稽查何の用かあらん。特に怪む、其人を爲りを見るに、固陋汗腐にあらざれば、佞媚狡猾、道を行ふへからず、衆生を濟度すべからず、寧ろ不學を耻ぶと斷言するを得策とす

第一 部 緒 論

るに、あまじむ才徳を以て人を感化せんとし、己を欺き、世を益せず、祖師を玷辱するを顧みず、鶴の眞似する鳥の如く、牛と競ふ蟾蜍の如し。思へよ、天稟の能力を恃む者は、天稟の能力に乏しき者なりと。噫嘻幾千の儒士爲すとあきかり。桑門に人あり、行戒といひ、日薩といひき、而して今や亡し。十萬の僧徒將さに何を爲さんとするか。埋葬の儀式を施行するの輩少しとせずして、善男善女の隨喜を享くるの徒多からずとせず。滿腹是れ足れりとせば已むべきも、苟も世に志あるもの、何を經典を涉獵して、醇乎として醇なる大道理を開發し、理想上東洋の妄りに輕視す可らざるを表示せざるか。已みなん、已みなん、鏡に對せざれば顔面の汗點を知らず。須く西洋哲學を翻覆し來て、東洋哲學の体貌を照すべし。西

洋哲學は缺漏なきに非ざるも、前後の關係を熟察し、數万言の議論も一線に貫穿する若く解釋説明し得るより、東洋哲學の字句に拘泥し、先後分離するは弊風を矯むるに便ならん。嗚呼東洋哲學、爾久く垢塵を被り、髮亂れ頰黷る方に鏡を把て新粧し、花顏笑を帶ひて寰區の觀者を惱殺せんか。想ふに哲學界は國土上に三分して、支那哲學を以て情を主とすと爲し、印度哲學を以て意を主とすと爲し、歐洲哲學を以て智を主とすと爲す。儒教の仁義を唱へ、鯀寡孤獨廢疾の養あるを願ふは、感情に迫らるるもの、佛教の苦業を修め、戒律を守り、勇猛精進して眞如を觀得せんとするは、意志を勵ますもの、歐洲にて事物を試験し、現象を分析し、尋繹究察至らざる無きは、智慧を磨くものなり。尤も互に混同する事ありて、儒の致知、佛の慈悲は言ふに及はず、ソクラテスの如く、ストア學派の若く、徳を重んじ志を堅くするなきに非ざれば、概すれば智情意の三様に分割せらるゝならんか。夫れ思想は智情意を包括し、而して哲學は思想を開發する者なれば、素より智を研き、情に基き、意を貫く所なきを得ざるに、哲學てふ語の新に泰西より渡來せし爲め、單に該博の智識を領得する事と判定せられたるは、止むを得ざるとは云へ、定に理の妥當を失へるなり。カントの倫理説は徒に議論と看做すに止まらずして、躬行實踐する所なき能はざるべく、シェリングの絶對、ヘーゲルの精神も雷に推理の結果と爲すに終らずして、沈思冥想身を幽邃の觀念界に撞入せざるを得ざるへし。方法を聞き、方法を告ぐるには、必ず先づ智

第一 部 緒 論

りて、儒の致知、佛の慈悲は言ふに及はず、ソクラテスの如く、ストア學派の若く、徳を重んじ志を堅くするなきに非ざれば、概すれば智情意の三様に分割せらるゝならんか。夫れ思想は智情意を包括し、而して哲學は思想を開發する者なれば、素より智を研き、情に基き、意を貫く所なきを得ざるに、哲學てふ語の新に泰西より渡來せし爲め、單に該博の智識を領得する事と判定せられたるは、止むを得ざるとは云へ、定に理の妥當を失へるなり。カントの倫理説は徒に議論と看做すに止まらずして、躬行實踐する所なき能はざるべく、シェリングの絶對、ヘーゲルの精神も雷に推理の結果と爲すに終らずして、沈思冥想身を幽邃の觀念界に撞入せざるを得ざるへし。方法を聞き、方法を告ぐるには、必ず先づ智

第一 部 緒 論

識に依らざる可らざるが故に、確實の知識を有せずして、専ら實行觀想を事とするは、順序を顛倒倒するに均しくして、現今の儒士僧徒の如き弊風に陥るへけれども、然ればとて偏に尋究を務め、辨論を業とし、斷へて身を挺して力行する所なきも、未だ哲學の正鵠を求むる者にあらざるなり。慮らざる可けんや。四海の内皆な兄弟たり、四海の外も亦皆兄弟たらん。東西の哲學曾てアレキサンドリアにて并合せしが、近代に及び、印度にブラモ、ソマジユの西教の旨義を混化するあり、西洋に米のイマルソン、英のリユヰス、佛のコムト、獨のフナイエルバクシヨペンハウエル等の佛教の義理を吸収するあり。交通の便利一ときわ進みおば、寰宇に存在せる諸般の哲理を統合するに至らん。我國佛教にて印度に趨越し、

儒教にて支那に對抗すれば、若し歐洲の哲學を考究し、轉して修行の法則を完備するに於ては、哲學に關して世界の中心たるを得ん。王陽明ソクラテス其人の輩出して、一世を風靡するも、亦た茲に在らん。

第五章 西洋哲學の變遷を通覽し來る

一身の事を考ふるも、猶ほ今の是にして、昨の非なるを覺へ、心を放て形役を免れ、清流に臨て詩を賦せんとするあり。歸去來辭一篇、是れ淵明が己れの生命を考察せるものなり。杜甫が憶年十五心尙孩、健如黃犢走復來、庭前八月梨棗熟、一日上樹能千廻、即今倏忽已五十、坐臥只多少、行立と吟せるも、自家の生涯を惟ふて、感慨する所ありしのみ。吁何人か經歷おからん。已往を追懷すれば、悲むべきことあり、喜ぶべきこと

第一 部 緒 論

第一 部 緒 論

あり、耻つべきことあり、誇るべきことあり、無量の感情躍り
 来て、轉た睡眠に就くを得ざるに至るならん。南州翁の垢塵
 不堪衣裳汚、村舍避半身亦清、と口ずさめるとき、其心中奈何
 がありしか。方寸の胸中、雷電あり、電光あらんか。ユゴーが腦
 髓の暴風と題して、シアン、ヴァルジアンの獨り恐怖兢悚す
 る摸様を描寫せし所、亦た宜べなりと謂ふべし。若し夫れ思
 想を舒展して、宇宙と對合し、内に冥々たるもの如何にして
 發生し來れるか、外に沓々たるもの如何にして變化し去る
 かを究察するに及ては、一眞一偽、一實一虚、殆ど思慮の安定
 する無きに苦まんどす。古來幾多の學士辨難論詰して未だ
 決定するなく、遂に或は哲學上の疑問の永く解説せられざ
 るとを憑信するあり、實に先後相容れず、左右相許さず、觀念

第一 部 緒 論

派は實質派に駁せられ、實質派亦た觀念派に嘲けられ、紛々
 として統合せざるの狀あるや、疑ふべからずと雖も、而も是
 れ能く哲學の發達し得ざるを證明するに足るか。天氣和暢
 輕煙淡々、方に笳を王子に曳かんか、將た馬を目黒に馳せん
 か、意を定めて目黒に赴き、而して瀛車に駕して遠く箱根に
 到るの優に若かざるを悟るとあり。些少の事件にも尙心配
 し後悔すると有りとせば、乾坤の大を究むべき哲學の思想
 に於て、異論紛議の絶へず繼起するは、至當の事にして、甲論
 乙駁輒く判定しがたきを以て哲學の假空なるを證せん
 は、昨是今非喜憂の常ならざるを以て人生の無益なるを唱
 へざるへからず。人誰か艱苦なからん。發憤して快樂の域に
 到達するを上智と爲す。哲學何の世か疑惑なからん。虚實を

第一 部 緒 論

判別して普通の眞理に近くを進歩と爲す。昔し徳川家康の平塚越中守を嘲弄するや、越中目を噺らして曰く、汝こそ身の上を思へ、幼少のとき今川義元に入質に取られ、繼祖父戸田彈正に生捕られ、信長家に引渡され、尾張の天王坊に三年まで押籠られ、起證文を書くに數度、中にも太閤の違言に背きて、秀頼公をないかしらにすると、誠に武士の耻さらしなりと。斯く言はば言ふを得べきも、是豈に家康の行爲を輕重せんや。家康の越中を放逐して問ふとなかりしも、人君として妥當の處置なるべし。哲學の空論妄談憑據する無きを言ふは、膚淺狹隘の見解、固より深く咎むるに及はざるなり。人の心事を知るに、其一生の行狀を詳にせんを要し、國家の形勢を知るには、其古今の變革を明にせんを要する也。

第一 部 緒 論

同じく、哲學の何たるを知るには、諸種の哲學士の意見を網羅するを要するあり。古來幾多の學說相聯結して思想の發達即ち哲學の全部を形成す。エルドマン曰く、諸般の哲學に於て一個の哲學を觀ると、フェルリエル曰く、哲學の歴史は哲學に時間を加へたるのみなりと。其れ然り、然れども凡そ歴史は事實を平叙するあり、原由を討尋するありて、傳記と史論との差異を生ずるが、單純なる傳記の失を咎めて、史論に混入せんとするは、不可の事にあらざるも、史論を改めて社會學とし、直に社會學を以て眞正の歴史となすに及ては、遽に妥當なりとの語を下す能はざる如く、哲學の歴史に於ても、スタンレーの様に單に事件を叙述するに止まると、頗る不足を覺ふるにせよ、ヘーケルに倣て専ら理法を尋究し、一

種の模型を作りて、他人の意旨を屈曲するに至ると、亦た未だ良好の方法と稱すべからざるなり。尤もヘーゲルにして古來の事蹟を探究し、一毫も遺す所なきを得ば、百世の學說を擧げて、盡く自家の哲學に囊括し、人物なく、國土なく、時代なきの觀ありしなるべけれど、如何に絶倫の學力あるも、斯の如きは到底望むべきに非ず。理法學に照らし、エレア學派を實在に對し、ヘラクリトス學派を轉化に對し、原子論者を個体の實在に對せしは、華麗なるも、アナザゴラスソクラテス等を排置するに自ら率強附會に陥らざるを得ず。ヘーゲルも始めは哲學と哲學史とを全く同一視せんとする狀ありしも、時ありて二者の充分に合同し難きを明言するとなかりしにあらず。究極すれば哲學即ち哲學史、哲學史即ち哲學

第一 部 緒 論

たるべきも、心意を伸開するの廣大あるとヘーゲルの如く、事理を識別するに聰敏あるとヘーゲルの如くして、猶ほ且つ之を完成する能はざれば、尋常の學者の之を企てて成らず、之を成して誤れるは、當然ありと謂ふべし。クローザンの徒、先輩の諸說を折衷すと稱し、皮肉を分離して紛々擾々を致すの非なるを悟らず。謹まざる可けんや。文化未だ昔からず、學理猶ほ明かならざる今日に於て、合宜の歴史を編叙するには、半ば事實を述べ、半ば原由を尋ね、一部は人心の自由にして拘束せらるゝ莫きを顯はし、一部は原因結果の關連を須臾も離脱すべからざるを示すべきなり。而も可成る事件も漸次に一定の理法に適合すべきが故に、意すべきは、順序を正しくし、變遷を明にし、事物の關連を正しくして興起せざ

第一 部 緒 論

第一 部 緒 論

るを表現するにあらんか。哲學の歴史を著作せるもの、往古に在てはラエルチユス、エムピリク、スストベウスあり、近代に於ては米にボーウエンあり、佛にクローザンフリーモイあり、英にワヰルリエルモーリスリウ、サド、ロモン、トあり、獨にツケルテンチマンリツテルライ、ンホルド、トレンデレンブルフ、ブランナス等、特に叙事より看るも、方法より看るも、最も信を考ふへきユーベルウ、ヒツ、エル、エルドマン、シウ、ガレルク、ノー、フイッセルあるあり。就て研究せば、正鵠を得るに幾からん。

アリストートルが哲學の起源をターレスの力に歸せしより、多くは之を以て西洋哲學の始祖と爲す。ターレスは紀元前第六世紀の人にして、爾後一千年を上世哲學とし、更に一

第一 部 緒 論

千年を経るを中世哲學とし、之より延て現今に及ぶを近世哲學とす。上世哲學は希臘哲學とも稱して、三期に區分し、第一期はターレスよりアナザゴラス及び原子論者に至り、宇宙の形質を論ずるを主とし、第二期は詭辨派よりソクラテス、プラトリアリストートルを経て、ストア派、エピキュルス派及び懷疑派に至り、人類の意志思想を論ずるを主とし、第三期は新ピタゴラス學派より新プラトリア學派に至り、神の本性并に神と人間世界との關係を論ずるを主とせり。中世哲學は哲學を以て宗教の附屬と爲せる者にして、時期を分てば、第一期はスコトス、エリゲナよりアマルリックに至り、アリストートルの論理學及び新プラトリア學派の説議を基督教の主意に順應せしめんとし、第二期はターレスのア

第一 部 緒 論

レキサンデルより文學の再興に至り、前期の教義を一層擴張し、宗門の意見をして毫も動搖する能はざらしめたるあり。近世哲學は哲學が宗教の羈絆を脱せんとせしより起れる者にして、第一期は中世寺院の教義より離れて上世哲學の眞意を窺ひ、更に進て汎濫散漫の新學理を呈出するに及び、第二期は經驗教推想教懷疑教の興隆せる時代にして、ベークン、デカルトよりヒュームに至り、第三期は最も新しくして、カントの批判法を用ひしより始まり、今日を通過し去て、未だ終る所を知らざるなり。惟ふにマールクスより今日まで二十四世紀時に消長なきに非ざるも、次第に啓發して次第に進化し來れる跡あるのみならず、上世哲學と近世哲學とは、事情を異にし、旨趣を違はすに拘らず、活々の働作を均く

第一 部 緒 論

すると、誠に驚くべくして、甲を以て乙を判し、乙を以て甲を考ふるに、艱深晦澁に聞へし所も、豁然として通曉し得るありが故に、哲學の歴史に由て思想の開發を知るには、必ず古今を通觀するを要するに似たれども、英雄の功業のみを識るに、其幼時の遊戯を顧みずして可あると等しく、哲學の宏壯なる結構を考へんと欲せば、最近三百年有力の學士が苦心して作爲せる意見辨論を察するを以て足れりとすべし。實に近世哲學は急遽の發生をさせる者にして、早く云はし近世の歴史と共に、希臘人の遁逃、印刷器械の工夫、米洲の發見、地動説の發明、宗教の改革、貨財の増殖、都民の自由、詩歌小説の流行等種々雑多の新事變に激動せられて興起せるなり。第一期といふは他にあらず、希臘人が土耳其人の侵略に

第一 部 緒 論

苦しみ、陸續として以太利に遁逃し來りし爲め、プラトリア
 リストートル等の意見を原書に就て考究するを得たりし
 より、從來文學上にて僧侶に籠絡せられ居たる徒輩頗ぶる
 感悟する所ありて、彼の論も非ならずやと疑ひ、此の説も誤
 らずやと疑ひ、宗問にて解釋し置きたる事どもを盡く撤去
 せんとするに及び、從てプラトリア等の學説を擴張せしは論
 を俟たず、希臘學者皆な甚尊重せられて、ストア派はリプシ
 ヌス、シヨッピユス等に由て再發し、エピキユラス派はガッセン
 ギに由て再發し、懷疑派はモンテイン、シヤロン、サンシエル
 ヴァアエルに由て再發するととなれるを目するなり。而して
 第二期は上世哲學に不満を抱き、プラトリアリストートル
 も信を置くに足らずとするより起れるなり。抑も古人を蔑

第一 部 緒 論

視して、自ら意見を立てんとするや、既に自己の智力の恃む
 べきを信するより、事物に接しておのづから獨斷法とせら
 ざるべからざるが、智力に感覺に係る者と思考に係る者と
 あるより、急速に失して僅に一端を窺ひ、或は事物を知るは
 感覺ありとして、經驗教を主張し、或は事物を知るは思考な
 りとして、推想教を主張すへし。乃ち一方にてはベーコンの
 經驗教を唱へて、ホッブス、ロックの繼くあり。又一方にてはデ
 カルトの推想教を唱へて、スピノザ、ライブニッツの繼くあり。
 其變遷を察するに、ベーコンはデカルトに對して、ホッブス
 はスピノザに對し、ロックはライブニッツに對し、而してロックの
 ヴァルテルを始めとし、佛國の文華を感化せるは、ライブニッツ
 のヴァラルを始めとし、獨國の文華を風動するに似たり。兩

第一 部 緒 論

々相對して互に抗爭して底止する無かりしが、更に一流を開き、ヒュームに及で、經驗教も推想教も共に爲すに足るなく、視ると、聴くと、総へて疑惑を容るゝを得ると爲し、全然破壊に終らんとしたりしも、カントの活眼其是非を看破し、智力を擅まゝにして事物に向ふ前に、智力の奈何に擅まゝにすべきやを究察せざる能はずとし、獨斷法を放棄して、更に批判法を使用する事とさせり。カントより以後を第三期とし、フッヒテシエリングを経てヘーゲルに至り、殆ど一大段落を結成せり。シヨペンハウエルヘーゲルを攻撃して起りしに、ハルトマンシヨペンハウエルに和して別に新説を出せしが、尙ほ春秋に富み、今後何等の卓説を吐露すへきや、未だ豫知すべからずと云ふ。更に眸を轉すれば、伊國の舊學を洗てロスマニの形而上學を發揚するあり、佛國の文華に依りてコントの實驗哲學を宣言するあり、又た英國近代の理學の進歩に乗してスペンサルの總合哲學を倡道するあり。是れ皆な大に注意して考察すべき所なり。本書主として近世哲學の第二期第三期を叙述し、事に就て部を分たんとし、獨斷法に因る者を一部とし、懷疑法に因る者を一部とし、批判法に因る者を一部とし、而してヘーゲルに及て完結を告ぐるものどす。嗚呼讀者、此より以下陳述する所、語句信偏、意義晦澁あるもの有り、雖も、多くは先輩諸師の精神の注ぐとある、宜く眼を拭ふて閱讀し、疑心冥想して六尺の軀体を天地に充塞せしめざる可らざるなり。

第一 部 緒 論

第二部 獨斷法の哲學

第一篇 經驗派

第一章 ペーコンの學說

李白あり、杜甫あり、而て韓愈あり。スペインサルあり、シエキス
 ピアあり、而てペーコンあり。彼の如き時代に、彼の如き人物
 の出づるは、怪むに足らざるべし。他事は措て問はず、唯だ韓
 愈とペーコンとは實に相類似する者あり。嘗に事情の相類
 似するのみならず、性質も類似し、行狀も類似し、文体も類似
 し、功勞も類似するなり。韓愈の理論は精確の意義に乏しく、
 して、ペーコンの理論も精確の意義に乏し。韓愈の文章は後
 人の好て拔萃する所にして、ペーコンの文章も後人の好て
 拔萃する所あり。而して韓愈の老佛を抵排して道濟天下之

第一篇 經驗派

溺と稱せらるゝは、ペーコンのアリストートル學派を攻撃
 して近世哲學の元祖と名けらるゝに類似す。若し人あり、ペ
 ーコンは何人あるかと問はゞ、當に答ふべし、西洋の韓愈な
 りと。ペーコン精はしくはフランシス、ペーコン、千五百六十
 一年に生れ、ゼームス一世の朝にセント、アルバンヌ子爵と
 叙せられ、玉璽官となり、大法官となり、職に失ありて貶黜せ
 られ、千六百二十六年に没せり。或は之を評して云ふ、人類中
 最も智慧あり、最も榮譽あり、而て最も卑劣ある者ありと。適
 評に非ざれども、復た其行爲如何を窺ふべし。
 ペーコン哲學の無用に歸するを憂ひ、之が一漸を謀りて思
 へらく、斯學の幾百年間も毫末の利益を顯はさゞりしは、左
 の五條に起因す。第一に、區々たる事物の試験に従事すれば、

第二部 獨斷の法 哲學者

人の人たる品位を汗辱すと妄想すると。第二に、宗教の陋事を迷信して、正理を顧みざると。第三に、羅馬人の深く道徳政を治を貴ひし爲め、爾來寺院に頭首たる者も、此二者の外か單に神學を修行せしのみなると。第四に、固く古哲の意見を信して、其範圍を脱離するを欲せざると。第五に、實物に就て實理を究めんとするも、速に成功せざるより、之を放擲すると。以上數種の事情よりして、學問の發達を見る能はざりしとされば、現に施行すべき方案は、學問の根本を洗滌し更張し革新するに在るが、然らんに、第一に百般の事物一々之を實驗に徴すると、第二に古來傳ふる所何等の確言名説も放棄し去ると、を要するなり。是れ取りも直さず歸納法にして、歸納法を確實に使用せば、頓に學問を振作するを得んと。

第一篇 經驗派

之をアウグメンテスに論し、之をノーブム、オルガヌムに述へ、奮勵して狂瀾を廻さんとせしも、惜いかな、望大にして、識足らず、特に著書を完結する能はざりしのみならず、數理に暗くして事實の精密を欠き、機智に過ぎて意義の正確を失ひしより、往々讀者をして卷を掩ひ他を願て欠伸せしむるを免れざるあり。然れども學者大抵茫漠の空理を索求し、世人舉て陳腐の舊説を憑信する時に當り、大膽にも學問の荒墜を辨し、百般の事物一々之を實驗に徴すべし、古來傳ふる所何等の確言名説も放棄し去るべし、と主張せるは、偉かりと謂はざるべけんや。尤も早くよりアリストートルの失を矯め、自家の意見を發表せる者あかりしに非ざれども、概ね空想に騫せ、汎濫散漫流離蕩様の觀ありしに、ペーコンに

第二部 獨斷の法哲

及び、多年經歷の結果に、微密なる試験の成效を參照し、兼ねて碩々たる名望を博し居て、異常の著作に従事せしが爲め、數個の書冊能く靡然として天下を風動し得たるあり。皇帝にノーブム、オルガヌムを奉獻せる文に、書中の事理を考究する茲に三十年、といふ語あり、以て其容易からざりしを推知すべし。スチユアルトがモンテスキエの言を證とし、ベ
 ーコンの十七世紀に甚しく英人に尊重せられしに拘らず、大陸地方にては佛國叢書の出版まで更に名聲を得る無かりしと言へるは、太だ實を失ふものにして、デアウグメンチスは發行の翌年に佛國にて再版せられ、數年の後ち全部佛語に翻譯せられ、デカルトも評し、ガッセンギも論し、殊にライ
 ブノツは口を極めて賞讃し、以て眞實の哲學を再興せる者

第一篇 經驗派

と爲せり。宰相リセリユも大にベークンのを褒揚せる事ありと云ふ。ポアチユル曾てベークンのの文章を友人に送りて曰く、若しホーラスを地下に起して之を讀ましめば、將た何と
 か言はんと。其れ此の如し、奚ぞ大陸に勢力なしとせんや。唯だ恐る英國にて或は推察の如き影響をかりしことを。ベークンハ議論の卓越あるより、寧ろ感化の偉大あるを以て知らる。其説く所多様あるも、主意とするは、百般の事物一々之を實驗に徴すべし、古來傳ふる所何等の確言名説も放棄し去るべし、といふに外ならず。方法を開陳するに盡力して、自ら方法を應用するに至らざりき。自ら實驗して何等の効績を得たるか、自ら舊説を棄て、何等の新論を發せるか、聞く所眞に尠少なりと雖も、而も俊傑の名は、遂に剝奪すべ

第二部 獨斷の法哲の學

からざるなり。凡そ世を感化するの大あると小あるとは、火力にあらずして、勢なり。勢に乗する、猶ほ圓石を千仞の山に轉ばすが如し。韓愈の佛教の道理に通せず、原道佛骨表等淺薄なる議論を發しながら、桑門の大敵と看做され、儒士の喧々として稱揚する所となり、僧侶の汲々として辨駁する所と爲れるは、勢に外ならず。勢ひを得れば、則ち傑士たるべく、勢を失へば、則ち痴人たるべし。激水の疾くして石を漂はすに至る者、是れ勢にして、范蠡も時の再び來らざるを憂ひ、蒯徹も時の再び來らざるを嘆せり。項羽自ら以て拔山の力蓋世の氣ありと爲せしも、時利あざれば如何ともす可き無を認知せざる能はざりき、眞に勢は人の價格を定むる者にして、世上の事物、戦争にまれ、統治にまれ、宗教にまれ、貿易に

第一篇 經驗派

まれ、機械の發明にまれ、學理の創見にまれ、皆亦唯だ勢に由るのみ。ベーコンの實力なくして、第十六世紀學術勃興の運に遭遇せしのみなるを諉誹するは、事理に通曉せざる狹隘の見識にぞあるなり。

第二章 ホッブスの學說

ベーコンに従ひながら、文章明白、議論精密、屹として倡首の風あるは、トーマス、ホッブスなり。ホッブス千五百八十八年に生れ、カヴェンディッシュ家に師となり、公子に隨ひて大陸諸邦に旅行し、チャールス二世の即位に及て、頗る優待せられたれども、持論の妥當ならざるよりして、議院の譴責を受けたるとありき。間々醜陋の行爲ありしが、當時の腐敗極まれる世態に對觀すれば、怒すべき所あるが如し。腐爛の風俗、發嘔の慣

第二部 獨斷の法 哲の學

習、是に於て其身を潔くするは、剛直の清淨教徒に非ずんば能はざるべし。ホッブス 舖精啜醜、何を以て清淨教に率由するを得んや。千六百七十九年に没せり。曾てベークソンの爲に翻譯の勞を取りしとさへあれば、ベークソンの論法を使用する自然の狀なるべけれど、性質の同じからざるより、さほぞアリストートルを嫌棄するに至らずして、辨論の方法も大に逕庭する事あるあり。其哲理の主旨に曰く、

哲學は原因結果を考察して得たる知識あり。宗教は天啓現示にて得たる知識なれば、哲學より除去せざる可らず。信仰と道理とは決して混同す可らず。經典は、現世界の事を教ふる爲めに、非ずして、別世界の天堂に達するの道を教ふる爲めなり。知識の本源は感覺にして、之を刺激するは若干の運動なり。感覺は刺激せられたる後、尙ほ永續するとあるが、之を名けて記憶想像とす。記憶は經驗の本となり、經驗は心期の本となり、隨て警戒節制の本となるあり。記憶よりして符號を發明し、交際の爲めに言語を定むるに至る。言語は衆多の事物を代表するより、概括と云ふを生ずるなり。符號と意義とを合するは、理會するにして、符號と符號とを合するは、計算すると、思惟すると、推理するとなり。能く之を合するを眞實と稱し、悪く之を合するを虚偽と稱す。故に言語と明晰に解釋するは、第一哲學にして、時間空間原因結果本體屬性を講求するは、之に次くものなり。哲學は唯だ有體に限精神の如き無體のものありとするは、四角の團圓を

第一篇 經驗の派

るとなすに似たり。上帝を哲學中に辨するも、或る

第二部 獨斷法の學者

に形骸を賦與して考へしによる。實に哲學の區域は有体に限るなり。故に之を分て自然と人造とを爲し、第一哲學、物理學、人類學、政治學の區分と立つるとあり。第一哲學は前段の所説の如し。物理學は數學、星學、生理學、視學等を包括するなり。人類學は認識の理を始めとし、言語の本原を論し、人間の道德上の能力に及ぶなり。理論を以て實用の爲めとし、人の目的とすべきは、單に利益にありて、單純なる幾何學の類も、器械に應用する爲めに設くるに過ぎずとす。其實用と云ふは、快樂を求め苦痛を避るの計を指すものにして、此計に優等なるあり、劣等なるありて、此を擇ひ彼を捨てんとすれば、意志を生ずるなり。意志は決して自由なるものに非ざるべし。何にても好むべき事は、皆善にして、何にても嫌ふべきと

第一篇 經驗派

は、皆惡なり。善の中にて最上なるは、生命を保つとにして、惡の中にて最上なるは、生命を失ふとなり。人々互に此最上の惡を被らするの力ある故に、天然の儘にては、世間一般に畏懼恐怖の念を懷くのみとす。然れども生命を保つ念の切なるよりして、相集りて平和の約束をなし、從て種々の情勢を生ずるに及ぶなり。即ち互に自由の働作を制限せんとを望む。此の約束は仁愛の情より起るに非ずして、私慾と畏懼とより生ずるが、而も此約束は衆人を一人に服従せしむるに非れば履行する能はざるあり。因て國家を生ず。斯く論し來れば、人類學を過ぎて自のつから政治學の範圍に入るなり。扱て國家の君主は、其の靈魂と見做すべき者なり。君主は即ち國家にして、餘人は毫も權力を有する無く、時に判斷す

第二部 獨斷の法哲

べきは、正と不正とのみなるが、正とは君主の命する所にし
て、不正とは君主の禁する所なり。主權は多數の人にも歸し、
少數の人にも歸し、一個人にも歸し、隨て民政閥政君政の別
を生ず。時代を以て言へば、先づ最初には多數の人に歸す。而
も最も善良なるは何なるやと問はるれば、現に存在し居る
ものと爲すべし。凡る變革は甚しき惡事にして、政体一たび
定まれば、再び變革するを務む可らず。然らざれば以前の
爭奪殺傷の世に復するあり。臣民は君主に對して、一の權利
を有せざるも、君主は何の法律にも束縛せられざるあり。國
の爲めにするにせよ、君主に背くは極めて惡しき事にして、
眞に國の爲めに、せんには、何處迄も原約を履みて、君主に服
従するに若くとなきなりと。

第一篇 經驗派

右はレピアタンの大要と稱する所なり。ホッブス始め人性論
併にデ、シブ、デ、コルポレ、ボレチコを著はせしが、後ち混然并
合して、レピアタンと名くる一大書を作爲するとなれり。
考察の誤謬に富み、推理の一方に偏するに拘らず、世に跨越
するの議論と謂ふべし。ロックは書を読むこと多からざりし
かども、ホッブスの著書を熟讀したること有りといふ。ハルト
リーの意見は多くはホッブスに基き、之に似たり。ホッブス人性
論に言へらく、概念の輒く連續する爲め、セント、アンドリュ
を思ふて、セント、ピータルを思ひ、更に石を思ひ、更に基礎を
思ひ、更に寺院を思ひ、更に人民を思ひ、更に擾亂を思ひ、輾轉
して底止する無しと。是れ取りも直さず思想の聯合を辨す
る者にして、ハルトリーの精細に説明して、大に名を成せる

第二部 獨斷の法哲學

所とす。ハラム曰く、ホッブスはデカルトの如く親密の徒弟を得ざりしも、識者の思考を煩はし、冥想の方向を定むると、一層甚しかりきと。其れ或は然らんか。ホッブスの君王に媚ひて、専制の政策を讚美し、若干の恩賞を拜受せしは、賤むへしと雖も、議論雄大にして學理を發揮し得たるは、稱するに足るなり。之を學淺く識乏く、強て醜事の辨護に従事して、寸毫の裨益を生せざるに比すれば、果して如何ん。ホッブス目的を達するに手段を擇はざるを喩へて曰く、吾れ陷穽に落つるとき、悪魔足を下すあれば、攀り以て昇登せんと。ホッブスは實に手段の良否を顧みざるの狀あり。然れども充分に目的とする所に到達したるかは、疑なしとせず。豈に邪惡の手段も究するとあるか。

第三章 ロックの學說

第一篇 經驗派

ジョン・ロックは千六百三十二年リントンに生れ、幼にして哲學醫學に志させしが、身体虚弱なる爲め、醫業を廢し専ら文事を職とするとなれり。深くシャフツベレ伯に信用せられ、種々の職務を帯びし上に、其宅にて當時有名なる諸士と議論を上下すると有りき。一時國事犯の嫌疑にて他郷に滯留せしとき、兼ねて朋友の勸告により著作に著手し居れる人心論といふ書を完結し、千六百八十八年の革命に歸國して、之を出版するを得たり。爾後書を著すと少からざりしが、遂に千七百四年に没せり。ロック性敦厚、嫉まず、貧らず、虚榮を好まず、唯眞理を索求するの風あるを以て、論述する所誤謬なきに非ざるも、讀者をして覺へず知らず敬服せしむる

第二部 獨斷の法 哲の學

に至るなり。且つ政治上宗教上公正の意見を懐き、絶えて利慾の爲め主意を曲げざるのみならず、文章平易にして解し易く、流暢にして倦むに及ばざるより、著す所の論文皆世人の喝采を博し、滔々として學界を風靡するの勢ありき。實にロツクの著は、哲理の書にて廣く俗人に愛讀せられたるものあらざるべし。但だ語句の俗流に通し過ぎて、却て識者の眼に曖昧糊塗に見ふるとあるは、一得一失是非もなき次第あり。

其哲學は約言すれば知識を考察する學問と名くべきものにして、第一に反面より論じて、本然の概念の存在せざることを示めし、第二に正面より辨して、知識の總て經驗より來ることを明にせり。第一項に就て曰ふ、世人は本然の概念と言へ

第一篇 經驗の派

ることを信じて、生るゝとき一種の知識を心中に受け來るべしとなし、其證として何地の人間も本來同様の性を有することを示すなり。然れども是れ誠に不當の事なり。假令ひ人間が本來同様の性を有することを事實とするも、其事實を他の理由にて解釋するを得ば、證たるの効能は果して何の處に在るか。況んや其事實の妄想にして取るに足らざるをや。世人の迷信たる、知るべきなり。彼の事實は實際にも理論にもあるまじきあり。實際を見んに、通常本然中の本然とする道義は、時代と土地にて色々と變更するなり。理論を見んに、有る者は有ると云ひ、事物は有ると同時に無きを得すと云へる言は、天下普通の正理の如くなれども、小兒愚人並に教育なき人々に尋ねれば、夢裏にも知らざる事共なり。心中に

受け來るとは、知るを得ると同様の事あれば、此等の觀念が眞に本然あれば、何程幼稚なるものも、判然と知らざる可らざる筈なり。或は云ふ、小兒の之を知らざるは、此の道理を用ゐるの必要なければなりと。是れ亦た服す可らざる辨解なり。小兒は早くより甘の苦ならざるを知らざるも、有ると同時に無きとを得ずと云ふ道理と用ゐるを思はざるのみならず、種々の理論を述べ立てるに至ても、なか／＼此理を領會する能はざるなり。本然あるものは本然ならざる者より前に存在する譯なれば、舌や耳目にて本然ならざるものを知る折には、業既に本然なるものを知り居らざる可らざるなり。而して事の全く反對するは、本然の觀念の存在せざるが故なり。心意は本來無一物にして、例へば一點の墨蹟なき白紙

の如きものなりとなすなりと。

第二項に就て曰ふ、心意は如何にして觀念を得るやと問ふに、總て經驗にて之を得るとなすなり。經驗は實に知識の基礎たる者なり。經驗に二様あるが、一は覺官にて外物を覺知するとにて感覺と稱し、一は内心の運用を覺知するとにて反省と稱するなり。感覺と反省とは、心意に諸種の觀念の光輝を通ずる窓なりと認めらるゝなり。偕て觀念は單純と複雜とに分る。單純の觀念は心意の刺衝を受取る、恰も鏡の物影に於ける様あるを云ふが、其一部は一個の覺官より來るものにして、例へば視官にて色彩の觀念、聽官にて聲音の觀念を得るが如く、又一部は種々の覺官より來るものにして、觸官と視官とにて延長運動の觀念を得るが如く、又一部は

第二部 獨斷の法 哲學者

思想意志の觀念の如く、反省より生し來り、又一部は感覺と反省と合して發生し、勢力唯一、連續等の觀念をなすに至るなり。是等單純の觀念は、知識の材料となるが、次第に群集して複雑の觀念を形成すると、毫も語集りて句とあり、句集りて章となるに異ならず。而して複雑の觀念は様式、本躰、關係の三類に分る、なり。様式の觀念は空間の變更即ち距離外面圖形等、時間の變更即ち急速永遠等、及び思想の變更即ち覺知記憶抽象等より成るなり。本躰の觀念は若干の單純の觀念が俱に共に發出するを認め、如何にして斯く俱に共にあるかと考察して、遂に其觀念の奥に万事統轄の物件あるを推量するより起るなり。關係の觀念は、事物の間は聯絡を付するに從て生出するが故に、豫め其數を確定する能はざ

第一篇 經驗の派

れども、最も緊要なるは、同一と差異との關係并に原因と結果との關係ありとす。凡そ知識は單純複雑の觀念より成立し、單純複雑の觀念は均しく經驗より來るとすれば、經驗の知識の基礎たると、復た疑を要せざるとなるべしと。ロツクの人心考察の法は、第十八世紀に在て、英佛獨三國の經驗教の主眼とあり、一方にてはバルクレーヒュームの感覺教を起し、一方にて佛國の唯物論を開發せり。且つ之に從て唯物論に心理を混せしもの、ハルトリー、プリストリーあり。而て歸する所を同くして、別に大影響を生せしは、即ち學理を以て有名あるニュートンあり。其說に云ふ、分解法は常に總合法に先んせざる可らず、デカルト派の虛妄に陥りしは、此に注意せざりしに由るのみ、分解法は試験と觀察にて斷案

第二部 獨斷の法 哲學者

を爲し、複雑より單純に赴き、特別の事より一般の事に進み、結果を視察して原因を考ふるにあり、総合は全く之に反し、原因を推して結果を求むるに在り。ニュートンハ痛く臆説を立つるとを惡みしが、自ら實驗究察するに當て、之を免る能はざりき。物理學上に大功ありしは、固より争ふ可らざるとあるも、宇宙全体に關して一種の説を懷き居れり。曰く、人は覺官によりて事物を知る、全能の上帝は覺官によらずして事物を知る、諸般の事物は實に上帝の包含する所なり、無限の空間を以て上帝の感受官と稱するも不可あかるべし。但し上帝の存在ハ世界の結構生物の機關等より引證して論せり。此他道義の説を敷演せるクラルクウチラストン、ハナソン、モリアルカドウ、シャルスマン、デビル、ハットラル等皆

多少ロツクの流を酌めるなり。

第四章 佛國革新時代の學說

ロツクの議論の佛國に知らる、や、該國の學者認めて以て眞確の道理と爲し、殆ど手の舞ひ足の踏みを知らざらんとせり。蓋し理論を弄びて極端に達せしむるは、英人の爲すに躊躇する所にして、佛人の決行を憚らざる所なり。加るに當時佛國の狀情、風を亂し俗を壞り、教堂に政府に概ね譏妄の事を喧くし、人生に適切なる利益を放棄して、瑣末の件にも上帝の爲めなり、天子の爲めなり、と嚴しく叱責請讓するの模様ありしより、之を厭ひ之を惡むの心あるもの、自のづから人事を有りの儘に暴露し、凡そ人類は斯々のものなり、權威は斯々のものなり、彼れ是れ定則ある若く云ふは、皆甚し

第一篇 經驗派

第二部 獨斷の法 哲學

き虚言なりと辨明せざる能はざりし爲め、ロツクの知識經驗より來るの旨義を得て、萬事萬端經驗に歸し、魂魄なく、神明なく、宇宙間唯擾々たる物体あるのみと爲すに至れる、固より當然の勢なるべし。然るに辨論の徒多くは文事に長じ、機に觸れ事に應して嘲笑批難するに、讀者をして或は捧腹絶倒し、或は忸怩差慙し、或は案を打て快を呼び、或は拳を握りて暈を裂き、悲喜感慨身の所在を妄れしむに至るありて、之を先代のコルチユラシシボッスエラ、フチンテン等に比すれば、措字の妙稍々劣る所なきに非ざるも、忌憚なく解説して、世上浮雲の如き帳幕を切り破り、人其れ然るかど覺へず、慄慄寒戰せしむるに及では、他に類を見ざるの趣味を有するに似たり。グナルテルの若きは實に其魁と稱すべし。而も此

第一節 經驗派

翁は主として寺院爵政の弊風を指摘せるものにして、哲理上寧ろ上帝の存在を認定し、思想の能力を覺知せる狀ありて、經驗の緊要なるを悟るも、諸事を擧げて外物の刺撃に對應するが如きとを成ざりき。但だ其の僧侶を嘲罵するの言語、人をして袈裟を憎み、靈魂に係る諸説を并せて嫌厭發嘔せしめたるならんか。デロダラムベルはアンシクロペヂ學會を創設して、万般の學理を討究し、談諧冷語を混して陳述せしが、是ぞ世に物界目前の事實を貴重せしめたる主要の元由ならん。然れどもロツクに隨て心性の理を解説せんと試み、哲學の歴史に入り來れるは、コンヂヤックエルベチユス等なり。

アッペ、ド、コンヂヤックハ千七百十五年に生れ、數種の書を著は

第二部 獨斷法の學者

せる後ち。バルマ公の師となり、授業卒りて更に學理の研究を務め、千七百八十年に没せり。始め全くロツクの説を固信したれども、後進て別に一機軸を出せり。即ちロツクに従ひて智識は總て經驗より來ると云ふ命題を用ひたれども、經驗を感覺と反省とに皈するを非として、反省も原と感覺に異らざるを陳べて曰く、反省は感覺に外ならず、心の作用は意志にせよ、觀念の結合にせよ、一として感覺に基かざるなし、人間の智識は全く感覺より成りて、毫も下等動物に違ふ所なければ、人間を指して完全なる動物とするも可なるべく、動物を指して不完全なる人間とするも可あるべしと。斯く論すれども、而も上帝を存在せずとし、靈魂を物質とする迄に論する能はざりき。之を辨し詰めたるは、エルベシユス以後に在り。

第一篇 經驗派

エルベシユスは千七百十五年巴里府に生れ、二十三歳にして農業取締に任し、大に貧民の愛敬を得しかども、種々困難の事情に遭遇せしより、辞して哲學に従事し、往々新説を發して内外の耳目を驚かせしも、痛く僧侶の憎む所となり、殆ど身を措くに苦まんとせり。其の意見は極端に走るの恐われども、其人とありは温厚篤實にして博愛の情に切なりしと云ふ。千七百七十一年に没せり。種々偏僻の論説あるが、中に倫理に關する見解は私愛を本とせしものなり。蓋し万般の智識が外部の感覺より來るとすれば、諸種の意志を外部の感覺より來るとし、道德の原素を苦樂の情に限らんとするは、自然の狀なり。エルベシユス曰く、吾人の行爲は一として

第二部 獨斷の法 哲學

私愛に由らざるなし、學問を修め事理を研究する如きも、私愛に出るのみ、而も其の私愛は凡て肉體の快樂を主とするものにして、心を勞するも、力を勞するも、感覺情慾を満足せんとするに過ぎずとす、道德の原理も職として此に在るなり、善の爲めに善を働き、惡の爲めに惡を働くと云の類は、愚の甚しきものあり、善と云ふ特別の事柄も亦し、惡と云ふ特別の事柄もなし、有る所は唯自愛の情のみ、人は動物と同じく慾心深くして、常に快樂を求め苦痛を避けんとのみ務め居れば、政治が賞罰といふことにて衆人を服従するが如く、道德も苦樂を主とし、善を爲せば快樂を増進し、惡を爲せば苦痛を増加する様に定めざる可らず、然らざれば道德は毫も効能なき者なりと、然れども議論の結局尙未だ唯物論の

第一篇 經驗派

甚しきに至る能はざりき。最も甚しかりしはラメトリーなり。其説に曰ふ、精神上の談は盡く妄想より出づ。人生の尙ふべきは唯だ肉體の快樂なり。上帝を奉信するは無實にして無益なり。世界は上帝を存在せずと定めざる以上は、決して幸福の域に達するを得ず。一たび上帝を除き去らんか、宗教の争亂は頓に止み、無用の僧侶は直に跡を收むべし。靈魂は名目のみにして、強て實を附すれば、腦髓と稱するより外なき様なり。腦髓に思想力の織緯あるは、何ぞ手足に運動力の筋肉あるに異らんや。人の下等動物に勝る所ハ、腦髓の結構と教育の作用とに在るが、之を除けば畜に同等の地位に下るのみならず、雑多の事に於て數等以下に居らざるを得ざるべし。靈魂不滅といふ何等の愚痴ぞや。道德といふも成るべ

く快樂を求め快樂を享くるの機會を失はざるに在るのみ。此を措て豈に他あらんやと。

ラメットリは斯く唯物論の極端に走しが、其死後數十年にして、萬有之体系と云へる書の著はれ出づるあり。是れ唯物論を最も巧妙に解説したるものなれども、何人の著作に係るかを知り得べからざるなり。或は云ふホルバック男爵なりと、或は云ふ其師匠ラグランジュなりと、或は云ふ全く別人なりと、未だ判然せざるなり。書中に云ふ。宇宙間唯た物體と運動と密に結合するあるのみ。物體靜止すと云ふは、運動するを妨られたるまでにして、運動の力を失たるに非ず。運動に引力と拒力との差あり。二力の差用にて許多の變化をなし、万般の事物を發出するなりと。之を基礎として左の諸

第二部 獨斷法の哲學

第一篇 經驗派

論を布延せり。一人は物體なり。人に心意と物體との兩部ありと云ふは、甚しき誤謬あり。心意も亦た物體なるのみ。心意の延長なくして見るべからざるを稱する者は、果して何事を思惟するか。天下豈斯の如き奇怪なるものあらんや。靈魂の身軀にあるとを云より、腦髓の身體にあるとを云ふべし。思想も意志も皆腦髓の發動に外ならざるなり。二心意と物體との兩部ありと云ふ誤謬よりして、上帝の存在といふ虚妄極まる考を爲すととかれり。人間は艱難に遇ふて、其原因を解する能はざるより、上帝と名くる一種奇怪の事を作り出し、一にも二にも之に依託すべきと定めたりき。恐怖、難澁、愚味は是れ上帝を製作するに必要な材料なり。祖先の卑屈ありしは齒牙に懸くるに足らざれども、今日猶ほ神學を

第二部 獨斷の哲學

を唱へて、眞面目に上帝の行爲を説明するは、實に片腹痛きとあり。天地の大道は無神教になり。但し此教を守るには、教育と勇氣とを要するあり。之をすれば謬言惑溺の流行する時代に於て、焉んぞ能く正大の理法を説くを得んや。無神教已に眞理ならば、奮て之を世間一般に傳播するを至當となすべし。已自ら宗教を信せざるも、下民の放蕩を制限する爲に、暫く上帝を尊ひ經典を講し置くべしと云ふ如きは、迷誤の大なるものにして、人が所有品を濫用せんとを恐れて、之れに毒藥を與ふるに異ならざるとなり。(三)靈魂不滅自由意志等は固より有るまじきとなり。人間は世界の一小物にして、金石草木と共にあらゆる情勢に束縛せらるゝなれば、若し之を指して万物の靈にて外物を支配し得るとせば、天地の公

第一篇 經驗派

道を破壊せんと勉むると同様の事となるべし。僅々六尺の身に於て千万年間千万里内に活動し居る大勢力の外に立たんとするは、愚痴極まるとあらずや。身亡して魂存すと思ふは、機械破るゝも其作用のみ残ると思ふに類するなり。眞の靈魂不滅は名譽を後世に傳ふるとなるべし。(四)前の諸説は萬有の躰系に由るものにして、之を信するは眞に有益有利のとありとす。眞に宗教は人をして妄想に淫惑し、無用の事件に困難を盡さしむるも、萬有の躰系は人をして現世に安心し、爲し能ふとを爲して、爲し能はざるを爲さしむ。其得失言はずして知るべし。道義を實行するにも、私利を主とし、人々各自に最も利益あるとを考へしむるを可とす。善人とは私利を専らとし、他人が利益を謀るに是非とも自己と

第二部 獨斷の法 哲學

俱に共にせざるを得ざらしむる様に働作する者を云ふか
 り。私利は是れ道義の大本なり。
 以上の四箇條は書中論說の大意にして、經驗教を極端に奔
 らしめたるものなり。ロツクが智識の經驗より來るとを述へ
 てより、其流を酌むもの茲に至て其極に達せりと謂ふべし。
 但しロツクの說の最も世上に影響せるは、心理より寧ろ政論
 に在り。政論に於てハモンテスキューン等皆頗る感化
 を被り、遂に迸りて米國獨立の微文と爲り、佛國革命の經典
 と爲れり。佛國の學說を考ふるに、大抵偏頗を極めし空論な
 れども、總へて眞摯に成り、眞摯の心情より出て、眞摯の筆端
 に發し、眞摯の事變を喚起し去れるなり。眞摯や、眞摯は古今
 の史乘に通して最も讚美すべき者に非ずや。

第二篇 推想派

第一章 デカルトの學說

第二篇 推想派

思慮して謂へらく、余は歐洲著名の學校にて教育を受け、諸
 般の科目に關する書類を熟讀したれども、結局得る所極め
 て僅少にして、疑念百出心を苦むるあるのみ。余は事理を通
 曉するに於て敢て他に譲らずと考ふるに、斯く知識を獲る
 能はざるは果して何故ぞや。嗚呼今日の學術、必竟何の裨益
 かある。眞理を求むる者は、須く師を離れ書を棄て、世界に就
 て究察せざる可らざるなりと。乃ち十六歳にしてラフレシ
 ュの學校を去り、繁劇の社會に交はり、軍隊に加はりて、諸處
 に旅行せしが、天稟に好む所未だ曾て懷を放れず、間を得れ
 ば、則ち大理を尋繹し、沈思冥想して遺す莫く、遂に千六百十

第二部 獨斷法の學者

ふるも、何を以て鬼神の我を欺きて、然らざるものを然りと
 辨識せしむるにあらざるを知らんや。外物は疑ひ得るを以
 て除くべく、身軀も疑ひ得るを以て除くべく、右も左も、上も
 下も、疑ひ得るを以て除くべきなり。(二)而も疑といふ事のみ
 除くべからず、疑ひて彼を除き、疑ひて此を除くも、其の疑自
 らは除くべからず。隨て其疑をなす所の我といふ事も除く
 べからず。我あらざれば、何に由て疑ふを得るか。我あらざれ
 ば、一物を疑はんとするも、能はざるに非ずや。苟も疑ふ、則ち
 疑ふと想ひ得るからには、我といふ事は必ず存在するなり。
 然るを以て、我は想ふ、故に我は在り、の二句を指して、確實な
 る基礎とあすあり。(三)我とは何物なるかと尋ぬるに、單に思
 想に外あらず。我といふ事より足を分離し、手を分離し、腹を

第二篇 推想派

分離し、頭を分離するを得るも、決して思想を分離する能は
 ざるなり。故に我の本質は思想なり、即ち精神あり、靈魂なり、
 微妙なる理性あり。我は視るべからず、聽く可らず、外物に比
 喩して辨明す可らず。唯だ自ら察知するに於ては、瞭然とし
 て現はれ、井然として顯はるゝなり。(四)我は想ふ、故に我は在
 り、といふ句は理證の法則と稱するとの標準を定むるあり、
 何を以て此句を目して理證を得たりとなすか。他なし、極め
 て明瞭にして、極めて眞實なりと認定せざる能はざるを以
 てなり。然らば如何なる事物にても、此と同様に明瞭眞實な
 りと認定し得るものあれば、理證を得たりとあして、更に争論
 するを要せざるなり。(五)彼の二句の外に別に理證を得た
 るものあるか。之を考ふるには、思想中にありとあらゆる者

第二部 獨斷法の哲學

を悉く究察せざるべからず。但し思想即ち觀念には、諸感覺の如く外部より受けたるものあり、妖怪惡魔の如く自力にて發出したるものあり、真理思想の如く、天賦にて保有したるものあり。何は兎もあれ、最も重要なる觀念は、上帝に外ならざるべし。此の觀念は純全といふ事を含み、隨て無限無邊といふ事と自存自在といふ事を有するなり。然る如きとは如何にして現出したるか。紛々たる感覺より通するの謂れなきを考ふれば、決して外部より受けたりとなす可らず。純全あるものは純全なるものを生ずるの謂れなきを考ふれば、決して自力にて發出したりとなすべからず。唯だ萬能の上帝が直ちに我に賦與したりとなすべし。吾も、人も、世界の諸事も、百方制限を受けざるかく、相互に關涉して僅かに

第二篇 推想派

維持保存せざるなし、獨り上帝や、量なく極なく、悠々として宇宙を覆載す。上帝は眞に實在するなり。上帝の存在すといふ觀念は豈に天賦にあらずや。且つ上帝のあるとは、自己の不充分なるとよりモ證明すべし。我既に不充分なり、而して純全あるとあるを知る。其純全なるとは、誰が有する所なるか。元來純全あるものにあらずんば、有する能はざるべし。三角合して二直角とあらざるものは、三角となすべからざるが如く、虚妄に存在するものは、斷して純全となす能はざるが故に、元來純全なるものは眞實に存在せざるを得ず。彼の上帝は元來純全なるもの、謂なり。焉ぞ眞實に存在せざるを得んや。上帝の存在は理證を得たりとして可なり。(六)上帝の存在の理證を得たるは、大關係を及すこととなれり。始に

第二部 獨斷の法 哲學者

疑はしき事物は悉く除去すべしとなし、圓は方ならずと云ふとまで、取るに足らずと主張したれども、上帝にして眞に存在すと定まりたる上は、再ひ斯く辨するを得ざるなり。強て斯く辨すれば、上帝を誹謗するの恐あり。上帝は純全あり。至善至良なり。奚ぞ人を欺きて樂となさんや。奚ろ人を惑して快とあさんや。我が明瞭に領會する所は、總て眞確あり。信じて快とあさんや。我が明瞭なるを以て信すべく、身軀も明瞭なるを以て信すべく、右も左も、上も下も、皆な明瞭なるを以て信すべきなり。(七)理學の原則は素より取るべきなり。二元の關係も採用すべきなり。凡そ自ら存在して少も他力を假らざるものを本軀と名く。實を言へば、上帝のみ本軀と稱すべきなれども、心意と物体とは、上帝の外他に依頼する所なしとて、推して本軀の名を附するとせり。此二種の本軀即ち二元は、各自特別の性質を有す。心意には延長なくして物軀には延長あり。一は毫も尺度にて測られずして、喜怒哀樂とか、單に精神的に解すべくも、一は少しも、精神的に解せられずして、何里何町なり、何間何尺なりと専ら尺度にて測るべきなり。共に本軀なるが上に、斯く互に反對するに於ては、決して直に干係を有する能はざるべし。身軀は我が所有の如くなれども、元と物軀の一部なれば、我が靈魂と直接の連絡をなすを得ざるなり。連絡ある様に見ゆるは、靈魂が壓迫せられて、腦髓の一部分に止りたるに由るなり。

前に陣述せる所を概括して見るに、デカルトは左の三事に於て、近世哲學の元祖とも稱せらるゝに似たり。第一に従來

第二篇 推想派

第二部 獨斷法の哲學

流行せる諸種の理論を排撃し、單に此様に見へ彼様に聞ゆると云ふのみにて信用し來れる事件は、何に拘はらず一切振り捨て、顧みると無く、第二に自ら思ひ自ら考へ自ら究むるを大切あることとなし、自ら察知するに於て瞭然として現はるる微妙ある理性あるとを説き、第三に靈魂と身軀、心意と物躰、意識と成立等の二元は、全く分離して互に背戾することとを辨し、其の連絡する模様を説明するは、即ち哲學の大問題となるべき様に論究し置きたるなり。此等とは總て容易なるが如くに思はるれども、第十七世紀の始まり迄は、世人の曾て考へ及ばざる所にして、後人をして新に意見を開發するの便を得せしめたるものとす。

デカルトは已に心意と物躰と互に背戾し、身軀物躰の一部

第二篇 推想派

なるより、我が靈魂と直接の連絡をなす能はざるを辨せしが、靈魂は如何にして身軀の上に働き得るか、身軀は如何にして靈魂の上に働き得るか、二者何はと連絡せずと云ふも常に相待ち相依りて働き居るか如く思はるゝに於ては、何か其間に關係様の如きものあきを得ざるべし、何様に之を辨明すべきか、とは是れアルノルド、ギューラン并ひにニコラスマアルブランシユの主として講究する問題となれり。ギューラン曰く、靈魂は直接に身軀の上に働くを得ずして、身軀も直接に靈魂の上に働くを得ず。我れ能く五体を運動すと雖ども、我といふ者は決して其運動の原因にあらず。何とあれば我は其如何にして運動し得たるか、如何にして運動の力が脳髓より手足に達したるかを辨知する能はざ

ばなり。自ら如何にして成るべきかを知らずして、能く事を成就するを得べきか。決して得ざるべし。茫然として知る莫く、而て適當の事件を爲すとは、甚た解し難きとなり。身軀にさへ運動を起す能はずとすれば、身軀外の雜多の事物には猶更ら起すを得ざるべし。我は此世界に對しては全く無勢力にして、唯だ一個の傍觀者たるに過ぎず、天地の森羅萬象を觀覽する者たるに過ぎず。我の本分としてなすべきは、唯だ考察にあるのみ。然るに此考察は實に不思議なりと云はざる可らず。看よ、如何にして萬般の外物を考察し得るか。外物は決して直接に我を刺撃するとあらず。其の吾を刺撃するは、光線の目に映するが如く、腦髓に一種の印象を残すものとす。其印象なるものは、即ち物体に外からざるなり。

第二部 獨斷の法 哲學

り。何を以て始より物体と背戻する我が靈魂の上に雜多の作用をなすを得んや。斯の如く彼も此を侵すことなく、此も彼を侵すとなしとすれば、其の能く關係を保有する様あるは、單に上帝の働作に外ならずと爲さるべからず。獨り上帝は能く靈魂と身軀とを合併し、心意と物体とを連結し、外部の事物をして内部の觀念たらしむるとあるなり。心物の連絡は、一として上帝の行爲に依らざるあらず。我が此事をささんと願ひ、彼事を行はんと望むに當て、様々に運動の生ずるは、我が願望に基くよあらずして、上帝の意見より來るものとす。我が靈魂に願望ある時は、上帝は我が身軀に運動を起し、我が身軀に變動ある折には、上帝は我が靈魂に觀念を生ずるなり。靈魂と身軀、心意と物體の關係は、恰も二個の時

第二篇 推想 派

第二部 獨斷法の學者

計が同時に動き、一個が十二時を打つとき、他も十二時を打つが如くなりとす、甲は乙の原因ならず、乙は甲の原因ならず。原因は全く上帝にあるなり。二者の關係は、只だ上帝の力にて同時に運轉活動する迄のことなり。二元の關係は豈に奇妙不可思議なるに非ずやと。

マアルブランシュは初めの程は之と同様に辨明し來りたれども、稍々進みて結果に近くに及て、大に差違を現はすととなれり。其意見に曰く、日月星辰等遠方の物件を知覺するは、靈魂の身軀を脱し、天上に偏歴して、之を採取するにあらざるべく、又た是等の物體が遙に飛ひ來て、我靈魂中に混入するにあらざるべし。日月等を見るは、其實体にあらずして、其觀念に過ぎたるなり。然らば此の觀念は如何にして生ず

第二篇 推想派

るか、固より外部より受けたるにあらざるべし、又た自力にて發出したるにあらざるべし。若し吾が心意の作用にて生出したりとせば、必ず我が好む所に從て、隨意に致すを得べき筈あるに、忽ち來り、忽ち去り、忽ち強くあり、忽ち弱くなり、少しも己れの意志に從はざるあり。且つ又た天賦にて保有したるものともなすを得ざるべし。若し然りとなさば、靈魂は生してより以來、種々の觀念にて充滿し、一事思ふ毎に限りなき程發出し來り、紛々雜々として皈着する所を知る能はざるあり。更に進みて考ふるに、是れ又た決して上帝の直に我に賦與したる所にあらざるべし。上帝の所爲は極めて單純にして、一度々々に觀念を興ふるが如き錯雜極るとあるとは、思ひもよらざるとあり。然らば如何が解して可な

第二部 獨斷の法 哲學

るか。他かし、諸種の觀念は悉く上帝にありて、我の之を得るは、心意の上帝に合併するものとなすべし。神は在まざる所なしと云ふも、之を云ふのみ。上帝の靈魂を支配し、万般の觀念思想を包括するは、空間の天地を包み、大陽大陰山川草木を囊括する様に見ふるに異ならざるべし。我は實に上帝の腹中に在りて、思ひ且つ考ふるあり。正圓は確に思ふべく、正三角も確に思ふべけれども、此の如きは實地に於て何處にも見得るとなきなり。とても感覺より得られたりとはなす能はざるが故に、又た引て以て上帝に純粹の觀念あるとの一証となすべきなり。知る所、覺る所、一として上帝より出てざるあらずとすれば、二元の互に背戻したるを密に連絡せしむるとも、此の万能にして無限無量なるものゝあす所

たるや、毫も疑を容れざるありと。

第二篇 推想 派

然らば則ち兩氏の考究せし所は、師の見解を論理上に整合せしめんとしたるに外ならず。デカルトは上帝のみを本體とあせしかども、心意と物体とは、上帝の外他に依頼するとなければ、姑く推して本體の名を付け置くを可とするとして、甚だ曖昧に付し去りたるが爲め、色々不審を受くるととなり、已に上帝に依頼するとあれば、何ぞ本體と稱するを得んや、何ぞ純全たる屬性となさざるを得んや、なぞ、尋問さるゝととなりしなり。兩氏殊にマアルブランシュは、茲に見る所ありしより、心意も物体も全く上帝の管轄する所なりとし、一にも上帝、二にも上帝、万事万物上帝の行爲に版着せざるなきに至らんとせり。是れ頗る矛盾を避るに似たれど

第二部 獨斷法の哲學

も、前後を穿鑿するに及んでは、尙ほ論法の精密を失する所
 尠少ならざるを見るなり。一方に偏するの嫌あるにせよ、能
 くデカルト流の意見を齟齬なき様に解説し得たるは、蓋し
 彼のスピノザなり。ショーザン曰く、マールブランシュとスピ
 ノザとは、デカルトの大弟子にして、マールブランシュは基
 督教的のスピノザありと。然り、然れどもスピノザの議論の
 齊整せるは争ふべきに非ず。ショー、フセル曰く、約言すれ
 ば、マールブランシュの教義の正確に理會せられたるは即
 ちスピノザの教義ありと、簡にして盡くせりと謂ふへし。

第二章 スピノザの學說

バルク、スピノザハ千六百三十二年アムステルダム府に生
 れ、幼にして父母と共に猶太教に屬し、孜々として經典の類

第二章 篤推想派

を講究したりしも、中頃變して専らデカルトの著書を研究
 するととなりしより、同宗の徒輩の爲めに破門を以て目せ
 られ、將に大に窘迫せられんとせしかば、去てリンスブルフ
 に赴き、事稍々靜定するに及で、更にハーヘーに住居し、眼鏡
 を磨きて衣食の料を取り、只一心に學理の推考に従事し居
 りしなり。カル、ルド井ヒ告くるにハイデルベルヒの教授
 と爲り、充分に意見を吐露せんを以てしたりしかども、固
 辭して應せざりき。性温和にして情慾に薄く、淡泊にして名
 利を厭ひ、居常悠々として一仙人の風ありしと云ふ。千六百
 七十七年肺病にて没せり。概して看れば、スピノザの論ハ淫
 靡を説くかと思はれ、玄之又玄象妙之門の句を解釋するか
 ど考へらるゝとあり。試に想へ事物の一部は特別の狀情に

第二部 獨斷の法 哲學

して、本体の眞性を顯はすに足らずとせんか。人と云ふは何ぞや。牛馬犬豕と異なるも、動物の一部にわらずや。動物とは何ぞや。植物と異なるも、有機體の一部にわらずや。有機體とは何ぞや。無機體と異なるも、物體の一部にわらずや。物體とは何ぞや。空虚と異なるも、延長の一部にわらずや。延長を去て何處に歸すべきや。次第々々に推し上ぐれば、玄妙にして一事の對待すべき莫く、一件の比喩すべき莫きに至らざる能はざるにわらずや。既に茲に至る、則ち太極と云ふも可なり、大易と稱するも可なり、眞如と名くるも不可なりとせず。スピノザは之を本體とし、上帝とし、萬事萬物之に依頼すと爲せるなり。

順序を追ふて看れば、スピノザの哲學の體系は、三種の總念

第二篇 推想 派

に本けるものにして、第一を本體とし、第二を屬性とし、第三を模様とするあり。(一)先づ初めにデカルトの説に依り、本體は自ら存在して毫も他力を假らざるものなりとし、更に開陳して謂らく、此の本體は唯一のみあるなり。何となれば毫も他力を假らざる者は、必ず無限ならざるを得ざるが、無限ある者は決して多く成立す可らざればなり。若し無限なるものにして、多く成立すれば、互に制限して無限たるとを失ふが故に、本體は是非共に一のみとせざる能はざるべし。世間の事物を見るに、就れも制限ありて、互に依從する様に思はるべけれど、其然る様に思はるゝは、即ち制限なくして全く獨立する者の存在するを考へ得るとを表するなり。實に制限なくして全く獨立する者あり、而して後ち制限ありて

第二部 獨斷の法 哲學

互に依從する者ありとなす。水ありて而して後ち波あり。水なくして波のみありと云ふは、誠に不都合の事なるべし。本體は渺茫たる滄溟の水に類し、發生するなく、消滅するなく、増加するなく、滅却するなく、千万万里の外に出て、千万万年の後に存するなり。人の浮沈する、草木の榮枯するは、漣波の動くに同しくして、世界萬類の發生し進化し衰頽し破壊するは、洪濤の上下するに異ならざるべし。本體は實に六合の大原因にして、毛より億万迄を管理す。焉ぞ全能の上帝なりと稱せざるを得んやと。(二)次にデカルトの二元論を採り、別に一説をあして云ふ、本體に思想と延長との二屬性あり、吾人は由て以て本體を辨識するを得るものとす。本體自らに就ては何とも判断する能はざるも、思想の屬性より觀れば、

第二篇 推想 派

思想とありて顯はれ、延長の屬性より觀れば、延長とありて現はるゝが故に、上帝を名狀するにも、無限の思想若くは無限の延長といふ事を以てすると、最も當れりとするありと。又たデカルトの如く二元の互に背戾するを論すれども、此が關係を辨するに及ては、大に之に異なる所あり。其説に由れば、思想と延長と分割し居るも、本體に入るに當ては全く同一の者と認められべし。唯だ其分るゝは始終本體を二様に見るとを得るに由るものにして、何なりとも一事件あれば、思想内に在りと爲すと同時に、延長内にも在りと爲し、何なりとも一變動あれば、延長内に在りと爲すと同時に、思想内にもありと爲すなり。圓と云ひ、方と云ふとき、一二の觀念の如くにも聞へ、一二の物体の如くにも聞ゆるは、同一の

第二部 獨斷法の學者

本跡をば、一度は思想より窺ひ、一度は延長より窺が故なり。如何に廣大なるものも、如何に微小なるものも、如何に衆多なるものも、如何に僅少なるものも、斯く二種に見られざるなし、世界の存在するも實に茲に在るあり。(三)然らば天地間に千万無量の事物あるは、果して何に基くべきか、他なし、本跡の模様にして、毎に二個の屬性に管轄せらるゝとすべし。模様とは前後左右綿密微細に制限せられ、縦になり、横にあり、色々様々に現はるゝことにして、即ち前に述べたる漣波や洪濤に當るなり。是等の模様は眼前に屹然として現はれ去るも、實に有るかと思へば、忽ち滅失し去り、實に無きかと思へば、忽ち生出し來り、有無顯滅誠に測る可らず。故を以て萬物は一も眞實として取るに足らずと爲すなり。眞實とし

第二篇 推想派

て取るべきは、唯だ夫の本跡のみ。滄溟の水が波濤の有無に關せざる様に、本跡は毫も擾々たる雜物雜事の爲めに、増減損得するとあらざるべし。以上は是れスピノザの意見の大略あり。之を逆に見て、畧言すれば、宇宙萬物は無數に現はるゝ模様は過ぎずして、模様は思想延長の二屬性に入り、二屬性は絶待の本跡に歸するあり。即ち次第々々に推上り、玄妙にして一の對持すべき莫く、一の比喩すべき莫きに至りたるあり。或人之を獅子の窟に比し、窟に陥入するの足跡多きも、窟より脱出するの足跡なしと云へり。此言や管に以てスピノザを評すべきのみならず、復た以て老佛の徒を評すべし。何れも複雑より單純に趣くことを思ふて、單純より複雑に趣くことを忘れ、眞を求めて

第二部 獨斷法の哲學

愉快に進行しつゝ、突如として空々に消失するの恐あるなり。若し此の如き學理に基て道義を説明せんとせば、如何が爲して可なるか。素より人類の地位を降下して論せざるを得ざるべし。スピノザ言へらく、人間は一種の模様たるに過ぎず。何ほゞ威嚴を具ふるとも、何ほゞ富貴を得るとも、多寡の知れたるものあり。彼を善とし、此を惡とし、甲を正とし、乙を邪とするも、一時假に名くるのみにして、本來一定して存在するに非ず。本體の洋々たる水より觀察すれば、善と云ふも一小波あるべく、惡と云ふも一小波あるべく、正と云ふも一小波なるべく、邪と云ふも一小波なるべし。奚ぞ喧しく議論するに及ばんや。而も更に推して所謂善惡とは何ぞやと尋ねれば、善とは吾人に利益あるとにして、惡とは之を妨く

第二篇 推想派

るなりと答ふる外あかるべし。其利益の中にて第一位を占むるは、道理を辨知するとなり。道理あければ、意志を發する能はず、外物に對抗する能はず、天地の規制に順應する能はざるあり。人にして道理あければ、何ぞ久しきを保つべけんや。偕て道理の最上なるは本體即ち上帝を覺知するとし、善の善なるは、上帝を認識し、上帝を敬愛するとなりとす。上帝を知るに當ては、心中全く清淨と爲り、榮光に會して悦はず、侮辱に遇して怒らず、澹泊を極め、高尙を盡くすに至るなり。諸人茲に達すれば、爭亂紛擾を見んと欲するも、其れ能く得んやと。此處にても頗る老佛と符合するあるを見るなり。實にスピノザの説を擧げて、老佛の教義を解すべく、老佛の非を認めて、スピノザの意見を駁撃すべし。但し佛教に比

するには、主として瞿曇固有の見と稱する小乘に依らざる可からず。

第三章 ライブニッツの學說

デカルトは俗人にして仙人なり。スピノザは純然たる仙人なり。而てライブニッツは純然たる俗人なり其の純然たる俗人あるライブニッツが純然たる仙人なるスピノザの教誨を受けしのみならず、理論に於て出藍の狀ありしは、奇なりと謂はざるへけんや。ゴットフリード、ヅィルヘルム、ライブニッツは千六百四十六年ライブニッツに生れ、十分に學業を了へたる後ち、外交に従事して諸國の朝廷の間に周旋し、功を奏せしと少からず。曾てルイ十四世の獨國を圖らんとを恐れ、巴理府に赴て埃及征略の利を説きたるとあり。伯林に大學を

第二部 獨斷の法哲

第二篇 推想派

起すの許可を得て、之が総長となり、次でドレスデン、ザンナにも全様の學校を設けんとを計りたれども事成らざりき、諸方に馳驅奔走したる爲め、大部の書類を編述する能はざりしかども、時に論じ、時に辨し、一章を作り、一編を爲し、長短巧拙の混淆する間に於て、前人未發の新說を發出したると擧げて數ふへからず。プリストートル以來尤も才識に富みたる者なりと云ふ。千七百十六年に没せり。

ライブニッツは哲學上スピノザの教誨を受けし事ある爲め、表面に於て大差を顯はすに拘らず、意見の方向自ら合同する所あり。先づスピノザと同じく本體といふ事を以て哲理の基礎と爲したるが、此をばスピノザの如く、玄妙にして一の對待すべきなく、一の比喩すべきなきものと爲さずして、

簡單に元子なりとなし、更に論して言へらく、本體は活動力ある者にして、常に活潑に働作せんとする、恰も張りきりたる弓の今にも矢を弾き出さんとする如くあり。然るに此の如く彈力様の事を有せんとするには、何處迄も己れを保存し、何處迄も他を抗拒するの状なかる可らず。其の己れと云ふ一個體は即ち元子にして、他といふ事柄も各々の元子に外ならず。本體は元子あり。決して一に限る可からず。一に限れば、他を抗拒するに由なきなり。必ず數多ならざるを得ず。數多ならざれば、己れを保存する甲斐なきなり。今元子の分子と異なる所を舉げんに、第一に元子は各自相互に差異ありとす。蓋し世界一として全く同様の者あらざる筈なり。第二に分子は單に一點にして、何様に分割せんとするも得

可らずとす。蓋し分割は延長あるより起る者にして、延長は實在とするより、寧ろ不明晰の概念となすべきなり。第三に元子は精神的の物件にして、始終生々の状を有する者なり。抑も元子は乾坤に遍滿し、幾千万個なるを知る能はざるが、其一個一個は各々精神を供へ、次第に昇進し、次第に變更改化するの傾きあるのみならず、自立自存の小世界を形勢し、互に他の模様を覺知し、百般の状勢を推量するを得るなり。原來宇宙は元子の集合より成り、視る所、聞く所、一として多小の元子を抱括せざるなし。而して元子に生命あるが故に、何程微細なるものも、何程廣大なるものも、幾分か生活發育の素を含有せざるなきなり。物體の構造を譬て云は、池に魚ありて、池は死物に見ゆるも、其内自ら生物を蓄ふるが如

くかりとす。偕て天上天下共に元子の充滿するのみにして、元子は各自一種の小世界を爲とすれば、幾多の元子は互に何様の關係を有するとするが、他に非ず、元子に知覺力の異同ありて、千百万の元子あれば、千百万丈け認識の度に差異あるが、概すれば不明晰と明晰とに分別し、金石水火等の無機体は、最も下等の元子にして、認識の不明晰すると夢も現も奇き熟睡の有様ありとし、草木は稍々發達して順序を定め、動物は頗る發達して感覺記憶を現はし、人間は更に上達して道理を辨知し認識の明晰を得たりとなすなり。是を以て元子互に他の模様を覺知するも、覺知するの狀に、曖昧あるあり、明亮なるのあり、茫然たるあり、判然たるあり。各自全世界を推知するの力あると、鏡の物影を現するに同じきも、

力に相異あると、亦鏡の中に鑑びたるもあり、曇りたるもあり、明にありたるもあるに異ならざるなり。元子各自に上帝に類するも、通常の元子は智識甚た不充分にして、上帝の智識は極めて充分ありとす。斯く思想の及ぶ所、只々元子の不明晰なると明晰なるとのみあるが、其の千万無量に存在するに係はらず、能く一致を遂げ、敢て乖戾矛盾するに至らざるは、預定和合と云ふ者あるに由るなり。即ち初めより一が幾分か進歩すれば、他も幾分か進歩すると定り居れるなり。靈魂と身体との關係の如きも、預定和合より説明せらるゝなり。原來元子は何處迄も己れを保存し、何處迄も他を抗拒するの狀なきを得ざれば、靈魂が身体に抑制せられ、身体が靈魂に干渉せらるゝかどは、決てあるまじきとなりとす。

第二部 獨斷法の哲學

然れば二者の密に關係するは如何なる作用に由るかを尋るに、預定和合に歸する外詮あかるべし。靈魂は靈魂たるべきことを爲して、身体は身体たるべきことを爲し、一は目的にて運用して、一は器械的に活動し、互に背戻して存在するも、最初より一定せる和合の爲めに、甲が何とか働けば、乙も何とか働く様に、確乎として極り居るあり。初より和合あり、初より一致あるに由りて、屹然獨立して他の順序を紊亂せんとするも得可らず。靈魂と身体とは、毫も互に交渉するべきも、十分に齊整平和なることを得るあり。抑も二者の關係に付ては、三説の現はるべき者とす。第一は普通の解釋にして、相互に關涉するど爲すとあり。第二はギユランの如く上帝の力にて順應するど爲すとあり。第三は則ち預定和合を旨と

第二篇 推想派

するとなり。中に就て第三のみ辨解の宜きを得たりと爲す。靈魂と身体との關係を二個の時計の針の一致せるに譬へんに、第一の説にては一の時計の針が常に他の時計の針を引き付け居るとし、第二の説にては時計師が絶えず雙方の針を一致する様に働くとし、第三の説にては機械は全く獨立なるも、毫も齟齬するとなきものとす。孰れか優、孰れか劣、言はずして知るべし。偕て預定和合の元子論に由れば、靈魂は固より不朽不滅の者ならざるを得ず。推し詰れば、死去といふ事は無き筈にして、通常死去と云ふは、靈魂より身体造構の元子の分離したるに過ぎざるあり。死すれば產生以前の有様に立戻ると知るべし。

知識の本源に關しては、ロツクに反對の意を表し、凡そ知識は

第二部 獨斷の法 哲學

本來固有に存在する者にして、決して内外感覺の經驗より發出するに非ざるを辨せり。而して本來の知識にして諸種の理論の原則とあるべきものは、第一に事々物々必ず充分の道理を有すると、第二に事々物々必ず綿密に連續すると、第三に事々物々必ず多少の相違あると、是なりとす。實は第二第三は第一より分出したるなり。第一にては如何なる事件も止むを得ざるとあるに非れば、生出する能はざる者とす。若し偶然興起したる事柄あれば、何故に偶然興起したるか之の疑問なきを得ず、之に限りて偶然なりとは、不審に非ずや、偶然ならずして興起し得ざりしとは、怪むべきとにあらずや、と段々と問詰すれば、偶然も必然の道理となるなり。斯く道理の免る可らざるを知れば、一事一件として連續せ

第二篇 推想 派

ざるなきとを許さざるを得ざるべし。何となれば或る所に連續の絶ゆるあれば、何故に格段に其所に斷絶して、他所に斷絶せざりしかを穿鑿するを要すればなり。又一事一件も同様なると能はざるをも許さざるを得ざるべし。何となれば假令二事の同様なるありとするも、時若くは場所の差異を認め、一は前に在りて一は後に在りと云ふとを陳述するを要すればなり。畢竟するに宇宙間の事物一として突然發出すると莫きものにて、偶々忽然として現はれ、倏然として滅するが如くに覺ふるも、其由來を問へば他の事件より少しづつ、推移し來り、少しづつ、變化し去るを知るなり。而して少しづつ、にもせよ、必ず多少殊異の點を有せざる無きとを疑ふ可らざるなり。此數ヶ條の原則はライプニッツに

在りては、諸説の基礎と定められ、前陳の元子論の如き、之が結果たるに過ぎずとす。

第二部 獨斷の法 哲學

ライプニッツの見解に基き、更に一種完備せる學理を提起したるは、クリスチヤン、ヴォルフなり。千六百七十九年ブレスラウに生れ、エーナライプシヒにて修業し、千七百七年ハルレの教授と爲り、十餘年間職を奉し、兼ねて普國朝廷評議官の任を帯ひしに、宗教上の紛議の爲め、内閣の命にて國外に退去せざる能はざる有様となりしが、フリードリヒ二世の即位に及びて、召されて貴族に列し、教官の職に當るととあり、千七百五十四年に没せり。國語にて哲學を解説し、獨逸流の哲學を創起する事は、ライプニッツの志望なりしかども、ヴォルフに及て著しく實効を顯はすを得たり。其の徒弟ヒル

第二篇 推想 派

ヒンゲルがライプニツグオルフィアナ哲學と云ふ名目を作爲したりしとき、之を非として強ちライプニツと同主義なりと呼ははるゝの不當なることを辨明せしかども、先輩の説に大に感化せられたるは、自らも甘んじて許す所にてありき。ヴォルフは新奇の意見を立つると能はざりしが、哲學をして諸種の法を包含し、全世界の原理原則を統轄するものとなさんとせり。由りて之が定義を下たして曰く、哲學は可能の學なりと。即ち何にても存在し得べき事共を盡く辨知するの學問としたるなり。而して可能とは矛盾なきとと定めしかば、可能の學は何等の事柄より形成するかと問ふに、左の諸學科を綜轄する者と爲す外なしとせり。吾人に認識の能力と意志の能力とあれば、哲學をも理論哲學と

第二部 獨斷法の哲學

實用哲學とに分たざるを得ずして、論理學は兩哲學の初めに位し、理論哲學即ち形而上學は實躰學、世界形質學、合理心意學、自然神道學を含み、實用哲學は人を一個の人として論ずる倫理學、人を家族中の人として論ずる家政學、并に人を國家中の人として論ずる政治學を有するあり。(一)實躰學は主として萬物に適應すべき主要の總念を辨す。先づ初めに矛盾の題を擧げ、一物は有ると同時に無きとを得ずとす。次に可能性即ち出來べきと云ふ題を擧げ、可能は矛盾なきととす。必然とは反對すれば矛盾となるべきとにして、偶然とは反對するも差支なきとなり、総て可能性あるは、想像に出るにもせよ、純然たる事物たるべきものにして、凡て可能性を有せざるは虛無なり。一物が多物より成る時は、一物を

第二篇 推想派

全体とし、多物を部分とす。而して物の容量は部分の數にて定むるなり。若し甲が乙の何故に存在するかを示し得る事情を存すれば、其事情を指して乙の根據とし、根據を有する所の甲を認めて原因とするあり。空間は相共に存立する事物の秩序にして、場所は一物が他物と相共に存立する特別の法式なり。運動は場所の變更なり。而して時間は連續して發出する事物の秩序なりとす。(二)世界形質學にては、世界を目して一定の法則にて相互に關係する所の事物の連續なりとす。事物は悉く空間と時間とにて連結すれば、世界と一個の集合躰とし、集合の方法を世界の本質なりとせざる能はず。増加するも、減縮するも、進暢するも、退却するも、皆自ら爲す所にして、要するに世界は一の大器械を成すあり。物躰

第二部 獨斷法の哲學

は固より運動の勢力を有するが、此勢力に基く事件は自然に成ると稱し、否らざるものは神變若くは靈怪若くは不可思議と稱するあり。世界の全成とは事物が相共に存立するにも、連続して發生するにも、能く一致和合するを云ふなり。三合理心意學の説く所は、左の如し。顧みて己れの己れたるを知るもの、之を靈魂とす。靈魂は己れと云ふ事物の外に、種々の事件を辨知するが、辨知するに明白なると明白ならざるとありて、明白なる辨知を思想と名くるなり。靈魂は形なくして世界を覺知するの力を有するとせば、下等動物にも靈魂ありとなせども、悟性と意志とを合むとすれば、精神と云ふ義にありて、人間のみに之ありとあすなり。精神の身体と合併したるは、即ち眞の靈魂にして、其能く合併する

第二篇 推想派

は、預定和合の理に由るあり。吾人の靈魂は單純にして分割すべからず。従て滅死す可らず。下等動物の靈魂は悟性なきが故に、死後に前の事情を追回する能はず。只だ人能く之を爲せば、人の靈魂のみ不死不滅と稱するなり。四自然神道學には万有の事理を解釋する所なきに非ざれども、要するに上帝許多の世界を形成せしも、此世界を以て最も善良なる者と爲すとの意を敷衍したるに過ぎず。

元來ヴォルフの説はライプニッツに従ふ所多きが、最も分離するは元子論にして此に分離せしが爲めに、却て種々の不都合を醸すとありき。而もライプニッツに比すれば、定義を苟もする莫く、語句嚴止にして前後齊整し、事理を辨折する所甚だ通曉し易かりしより、獨逸の學理上に大影響を及ぼせ

り。巧に其説を開陳したるはビルヒンゲル、パウマイステル、
ハウムガルテンマイエル等なり

第四章 獨國革新時代の學說

ライブニッツ、シャルフ既に學界を風動せり。爾來特種の道理
を文辭に發するもの頗る衆く、述懐に、祈禱に、書翰に、冥眇の
思想を顯はし、以て佛國革新に對して獨國革新を表せり。革
新とは原語アウフクレング、謬見を一掃するの義にて、彼
に在ては勢に乗して經驗教の極端に奔りたりしに、此に於
ては時に應じて推想教の極端に陥れり。乃ち思想を觀し、由
て以て靈魂不滅を論するメンデルソンの如きあり、由て以
て功利的の道德を辨するガルベージェンゲルアプトの如き
あり。パセドゥは一個人の幸福を以て究竟の道理とし、ライ

第二部 獨斷法の學哲

第二篇 推想派

マルスは宗教が現世の快樂を賤まずして、却て之を獎勵す
るの傾あるを述べ、スタインバルトは凡そ智慧といふ事の
最上の快樂を得るに外ならずして、基督教も此理を主とし
て興起したるものにして、主樂教と稱へらるゝを至當とす
るを説けり。主觀法の流行するより、一轉して自分一個を考
察するを好むの甚しき、遂にルソーの著名ある懺悔話
を出すに及べり。眞に何事も自己の心に限り、自己の意想
を特み、自己の行爲を誇り、自己の經歷を讚し、慷慨沈鬱して、
他の狀勢を顧慮せざりしこそ、當代盛行の氣風なれ。

第三部 懷疑法の哲學

第一章 懷疑の媒介

バルクレー曰く、外物の森然として成立すると思ふは、大なる誤謬なり。前後を眺め、山あり、海あり、草木あり、禽獸ありとするは、斯々の感覺あり、若くは斯々の知覺ありとするに違はざるなり。暮色遠くよりして至ると云ふも、見る所は暮色のみ。遠寺の鐘聲を聞くも、聞く所は鐘聲のみ。遠を稱するは皮膚の感覺并に筋肉の感覺を交へたるなり。一間とし、一町とし、一里とするも、外物の實に然るに非ずして、種々の感覺の合併して顯はるゝなるべし。外物は寔に存在せざるなりと。是れ外物の確立を許容せざるものにして、半ば懷疑に屬せんとしたるなり。然れども之を説く所のバルクレー

第三部 懷疑法の哲學

曰は、大に懷疑教を嫌忌せる者にして、更に語を繼て言へらく、外物は即ち内なり。天上天下の森羅万象みな感覺の外に出でざるあり。奥を極むれば、只だ精神のみありとす。概念と意志を本とする所の精神のみ存在するとす。然ども翻て考ふるに、感覺は精神自ら造出するに非ず。朱を見て黒と思はんと欲するも得べからず、青天を仰て雷を聞かんとするも得べからざれば、感覺の意志に由らざると、明白なり。然らば如何にして生ずるか。吾人の精神より一層優等の精神ありて、之を司とるなるべし。上帝我に万般の感覺を與ふるなり、上帝我に諸種の知覺、諸種の思想を授くるなり。何となれば是等の件々は、精神的の者に非れば、採用する能はざるなり。但し觀念を授與するのみにて、自ら何の觀念をも存せざる

第三部 懷疑の法 哲學

とは、甚だ不道理なるを以て、上帝自ら諸般の觀念を懷包するど爲さざるを得ざる可し。吾人は上帝の觀念に付て万事を察知し能ふなり。宇宙は觀念の連續と俱有とに過ぎずして、宇宙の法則は觀念の連續し、若くは俱有する一定の順序に外ならざるなりと。又た人に語て曰く、余は何等の働作をも意志より分離する能はず、又た意志を以て精神外に存在すど爲す能はず。故に働作ある毎に、其の精神中に包含せらるゝ事を認知するなり。余は諸君の如く外界より刺撃を受け、諸君の如く、外界に勢力あるとを信す。而も勢力の解釋に至ては、全く諸君と背戾す。余は以て精神と爲し、諸君は以て物体と爲す。余は結果より働作を推し、働作より意志を推すを順當とす。且つ余が覺知する事物は、余の心を離れて存立

第三部 懷疑の法 哲學

すどするも、觀念たる以上は、理會力に供はざる可らざるや、必せり。然るに意志といひ、理會力といひ、實に精神を形成する者ありと。又曰く、余は事物をして觀念たらしむるに非ずして、寧ろ觀念をして事物たらしむるなり、諸君は覺知せる事物を指して外見に過ぎずとす。余は目して事物其れ自身、即ち實體と爲さんとす。諸君の説に隨へば、觀念は實體に非ずして、事物の表象なるが故に、吾人の知識は觀念と事物との一致如何に依りて、眞偽の差別を生ずるものとす。然らば事物にして辨知するに由なき者たらば、奈何にして可なるや。吾人表象のみに接して、實體を知る能はざらんには、直に懷疑派に陥りて、眞理の望を亡失すべき筈に非ずやと。此に由て之を觀るに、バルッレーは務めて懷疑教を避けん

第三部 懷疑法の哲學

とする者の如くなれども、バルクレイにして漸く避くるを得たるのみ、他人に在てはロックの説に隨從しながら、斯の如き考察を爲すに至らば、心象をも打破し盡して、純全たる懷疑教に陥るべし。即ちヒュームの如ならん。バルクレイにして推想派に屬すれば、自然に唯心説に傾きしあるべけれど、元來經驗派より出て、諸事を觀念に歸せしも感覺の重要を曉りしに因るものにして、若し宗教心の意想を抑制する無くは、萬般の事物を目して紛々雑々たる感覺に基かしめしならん。其のヒュームを距る一髮のみ。唯だ人物の相違よりして、言語上一髮の差を大河の如くなせる状あり。ハマン曰く、バルクレイあらざればヒューム出でず、ヒューム出でざればカント顯はれずと。誠に是れ自然の狀態にしてヒュー

第三部 懷疑法の哲學

ムはバルクレイの爲めに懷疑を助成せられたるものなり。李斯の荀子に學て、書を焚けるに異なりとせんや。此のザヨル、バルクレイは千六百八十四年愛蘭土キルクリンに生れ、學事卒業の後ち、人智論を著はし、大陸諸國を漫遊し、歸て僧正と爲り、有益の事業を成せしと少からずして、榮光を佩ひて千七百五十三年チックスワルドに没せり。詩人ポープ之を稱して曰く、普天の下萬徳を備ふる者なりと。アッタル曰く、かゝる君子は唯だ天使に對比すへしと。實に人と爲りに就ては、毫末も批難すべき所なきなり。

第二章 ヒュームの學說

近世懷疑教の頭首と看做さるゝデビッド、ヒュームは千七百十一年エザンバラに生れ、初め法律を學ひ、次に商業に従事

第三部 懷疑の法 哲學者

し、後に専ら歴史と哲學とを修むるとに決し、巴里府の公使館に書記の任を帯びし時、彼のルソーと交友し居り、爾來悠々自適して千七百七十六年に歿せる人あり。元とロッシの經驗論を成るべく矛盾なき様に解釋せんとし、一步を進みて萬事萬物悉く習慣に成ることを主張し、全く懷疑教に陥りて、預想外に從來の獨斷教を襲撃するを得たり。凡そ偏頗の議論は早晩懷疑に移る者にして、懷疑は偏頗を自滅せしむるの器械と謂ふべし。而も懷疑教は永く獨立して一派の哲理と爲るの價格を有せず。物に確實なるを求むるに、事必ず疑ふべしと云はゞ、懷疑ながら既に獨斷に轉せるなるべし。懷疑は一時他を撃破するの用に供すべきのみにして、ヒュームの懷疑はカントをして従前諸説の弊風を矯め、自ら一新の意

第三部 懷疑の法 哲學者

見を發せしむるの効ありき。ヒュームの心理を説く、ロッシに類し、一層的實なる所あれども、自家固有の學説を畧陳すれば左の如し。曰く、吾人は如何にして二物の間に原因結果と云ふ關係あるを知るか。先天に依るにもあらず、經驗に基くにもあらずるべし。何故かと尋ぬるに、先天の智識は、甲は甲なり、乙は乙なり、と云ふ如き同一の事件にのみ限るとなれば、原因と云ふとより、之と全く相違する結果といふ事に移る能はずして、經驗は二個の事物の前と後とに連續するを覺へしむるに止まりて、彼れ必ず此を起す、此れ必ず彼より生すと云ふ様なるに轉するを得ざればなり。實は經驗にて推理すと稱するは、偏へに習慣に基くとなり。一の事が常に他の事に伴ひて起るを認めれば、習慣にて彼事が出れ

第三部 懷疑の法 哲學

ば此事は必ず現はれざるを得ざるべしと思ふべく、幾度も風吹きて草の靡くを視れば、風は草を靡かす原因あり、と勝手に断定するに至るべし。然れども時間の連絡は固より原山の連絡と異なる所あれば、推して想へば、習慣のため更に經驗外の觀念を生じ、眞偽如何を判断するに由なき様になる。爲すべきなり。倂て原山の説は他の必然の關係即ち勢力の如き者にも應用するを得、其の勢力の觀念は何處より得ると問ふに、決して感覺よりすると答ふる能はざるべし。感覺を刺衝する外界の事物は、個々別々に存在するを示すも、必然の關係を現はすを得ざるなり。然らば反省よりすると、推すべきか。早く考ふれば、然りと云ふべくして、意志の爲めに身軀の動くより勢力の觀念を生せりと云ひ得るが

第三部 懷疑の法 哲學

如くなれども、能く考ふれば、斷して然りと云ふ能はざるべし。心意は身軀が如何にして動き得るかを知らざるのみならず、身軀は必しも意志に従ひて動くにあらざるとなれば、自ら身軀を動かすと云ふも、經驗の業に歸せざる可らざるやうなるが、其の經驗なる者は、一物の他物と共に存在するとを示して、一物の顯はれて他物を抑制するを表せざるや、明白の事あれば、若干の觀念が連合して、習慣の久まき、遂に左様ありと決定するに至れりと爲す外なかるべし。必然の關係は一として觀念の連合より起らざるなし。色々様々の觀念あるが、或は相合し、或は相離れ、或は相近つき、或は相遠かりて、終に外物と云ひ、自己と云ふ様あるを生出するとし、靈魂の類も觀念の集合する習慣より斯るものありと

認むるに過ぎざれば、觀念離散するに及んでは、固より滅亡せざる可らざるとすとす。故に、ヒュームの説に従へば、万般の道理、諸種の原則、盡く習慣にて認定せるに及べりと爲さるを得ざるべし。斯く習慣に皈せしは、思想の力を熟知するの階梯となり、後世の哲學上に偉大の影響を與へたるなり、看よ、勢力の如く、原因結果の如く、經驗より來らざる知識ありとせば、經驗教を脱して、別に考究する所あるべき筈に非すや。カント原と此に感悟せしなり。

第四部 批判法の哲學

第一篇 超絶的

第一章 カント

山樂むべく、水樂むべくも、山水相繞りて奇觀を呈するに若かざるべし。孔孟と老佛と宗儒家に至りて近似し、釋氏の教旨と婆羅門の宗義と密教に於て協合せるは、自然の狀勢なり。孫權江東に雄視し、曹操天子を挾て諸侯に令する時に當り、孔明の荆益を跨有して漢室を興さんと謀れるは、成敗に拘らず、策の宜を得たるを稱揚せざるべからず。經驗教と推想教と極端に達し、懷疑教に移りて破碎し畢らんとするに及び、諸派の學理を熟考して、殊に完備せる哲學を興起したるは、即ちカントなり、之に先ては或は物体を揚げ、心意を抑へ

て、萬般の辨識外界の刺撃より來るとし、或は心意を揚げ、物体を抑へて、諸種の知識内界の發動より起るとし、又或は、心物共に依頼するに足るなく、何等の事件も疑惑を容るべしとし、紛々として統合するを得ざりき。佛國の學者はロックの意見を獲て、何様の旨義を懷きしか。獨國の學者はライプニッツの學理を考へて、何様の主旨を抱きしか。唯だ眼前に擾々たる物塊ありしのみ。唯だ意中に單純なる自己ありしのみ。復た認識の果して當るや否を問ふ莫し。夫れ此の如く斷乎として僻説を墨守するは、寧ろ諸般の事理を拋棄するに劣らずとせんや。知らざるを知らずとするは、是れ知るなり、との古言に漏れず、ヒュームは懷疑に陥りて却て眞法の端緒を開きたるが、カント轄然として悟る所あり、獨斷法を棄て、

批判法を取り、先づ認識の必ず經驗に基くやを尋ね、外物の刺撃を以て資料とし、空間時間并に十二範疇を以て形式とするを考察せり。觸るれば寒冷、視れば透明、味へは淡泊、是れ感覺に屬するも、之を一個の氷とするは、何物の然らしむるかば、ヒュームの疑へる所にして、カントの單一といふ範疇にあてはめて主觀に屬せしめしものなり。超絶即ち經驗前の作用を論せしも茲に起因す。實にカントに及びて物体其力を保ち、而て心意亦た其位を占むるなり。究意すればカントは諸事を觀念に歸するの傾向あれども、單に觀念に歸するに非ずして、主觀客觀おのづから相當の地位を以て並立する如く爲せり。其の論説に缺點あるも後人に事理を辨別するの便益を與へたると、口を極めて讚美せざるべけん

第四部批判法哲學者

や。著書刊行の後ちストイドリン之を評して曰ふ、新出の哲學は諸學科の上に不可思議の勢力を有す、從來哲理の何たるを知らざるものにも、此學を講究するの愉快なることを感せしめたりと。同時にフヒテ評して曰ふ、此哲學は未だ芥子の一粒に過ぎざれども、久からずして諸方の人類を掩屏するの大木と爲り、高尚賢明の種族を養成するなるべしと。過稱に類するも、實際の事情にてありしなり、哲學に在ては百川を障へ狂瀾を廻せりと謂ふも可ならんか。

傳記を案するに、イムマヌエル、カントは千七百二十四年四月二十二日普國ケニヒスベルヒに生れり。兩親は馬具を業として甚だ貧困なりしも、教法に熱心して頗ぶる正直篤實の狀ありき。由りて初めの程は母の師友たるシユルツに從

第一篇超絶的

て専ら神學を修めしも、哲學、數學、物理學は生來に好む所なるより、却て大に上達するを得たり。シノー、フヰセル謂らく、デガルト、スピノザカントの如く新派の哲理を主張するもの、多くは後年力を盡して排撃する所の教育法にて養育せられ居るとは奇なりと云ふへしと。父死してより益々貧困に陥り、一二富家の子弟を教導して、僅かに糊口を繋ぎ、故郷の大學の下等講師たるも、尙ほ活計の道を求むる能はざりしが、書籍館の係りと爲るに及び、年に五十圓を得る様になり。十二年間教授たらんと欲して、任に當るを得ず。四十六歳にして始めて論理學及形而上學の教授と云ふ名を有することとなり、五十七歳のとき即ち千七百八十一年漸く純粹道理批判を著し、千七百八十八年に實踐道理批判、千七百

第四部批判法の哲學

九十年に斷定批判を發刊し、爾來純粹道理之宗教等種々の書冊を出たし、毅然として當時第一の大家たりとの名聲を世上に博するを得たり。常に故郷に止り、エーナより聘するも、エルランゲンより聘するも、ハブルより聘するも、應せずして、爲めにケニヒスベルヒの大學をして全國の注目する所どかし、修學の爲め數百里外より到來する者あらしむるに至れり。ウルツブルフの哲學教授ロイス、カントを訪ふて曰く、予は單に先生を一見せんが爲に、三百餘里の道を経過し來れり。居常澹泊にして嘗て妻を娶りたることなし。身体弱小の方なりしも、身を攝する堅固にして、無病健全にて八十歳の高齡に達せり。千八百四年二月十二日に没せり。想ふに市外の矮屋に芳園を繞し、毎朝五時に食卓に就きて、一

第一篇超絶的

椀の茶を喫し、點心を取り、烟草を薰へ、二三時間講義の後ち讀書書寫を事とし、午後一時小宴を張りて、二人乃至七人の客を招き世間の雜事を談話し、陶然として樂めるは志を達せる時の平生の舉動なり。特立獨行して道義を確守し、事を爲すに規則正きと時計の如く、眞に碩儒の態度あり。學者の行狀是を以て足れり。夫の夙に大學教授となりて虚榮を求め利祿を貪り、而て常に自家の見識を立つる能はざるのみならず、先輩の意見すら充分に通曉するを得ざるものカントの風を聞かば、亦以て少く愧つべきあり。カントは忍耐に富み、造構に長し、一事一件亂雜に放却するを欲せず、議論必ず秩序を有し、學理必ず体系を成すが爲め、誹謗を好む讀者をして叙述の拙劣、文字の晦澁を嫌厭せざ

第四部 批判法の哲學

らしむるが如し、哲學の分類を定むるに、心理の法則に因らんとし、心意に認識、意志、感情あるより認識自らの道理に關するを純粹道理と爲し、意志の道理に關するを實踐道理とし、苦樂等の感情の道理に關するを斷定とし、從て批判の目的よりして、純粹道理批判、實踐道理批判、斷定批判の三大書を著述することゝなれり、此三大書が詞辭の快妙なる莫く、辨論の詭幼幼なる莫く、而して靡然として一世を動搖し、傲慢ある英佛の人民をして、獨國の哲學の尊重すへきを知らしめたるは、哲理缺乏の好運に際會せるに由ると云ふものゝ、亦絶世の卓見能く思想發達の順序を看破し得たるに依らざるあらんや。左に書中意見の大要を掲げん。

第二章 純粹道理批判

第一篇 超絶的

純粹道理批判は純粹道理にて抱有する所を總括して論ずる者にして、換言すれば吾人が先天にて辨知する所を充分に究察するものと認めらるゝなり。吾人の知覺するは如何なる作用に依るかは、即ち最初の問題にして、カントは感性と悟性との二性よりして説明を始めたなり。先づ第一に感性よりして先天に抱有する所は何等の者なるを問ひ、第二に悟性よりして先天に抱有する所は何等の者なるかを尋ね、第一をば超絶感覺學に、第二をば超絶論理學に辨せり。冒頭を概すれば、感性と悟性を以て認識の要素とし、感性の爲め感覺を得て事物を感受し、悟性の爲め總念を作りて事物を思惟すとし、感覺を踏まざる總念は空虚にして、總念に合せざる感覺は紛亂なりと定むるなり。要するに感覺と總念

とを目して吾人の通曉力を發出すると斷するのみ。偕て是より前の二問に應答することゝあるなり。

第四部批判法の哲學
 (超絶感覺學)第一の應答は超絶感覺學にあるなり。論して曰く、感覺の先天の原理、即ち色香味觸等の諸感覺に本來固有する形式は空間と時間とに外あらざるなり。空間は外部の感性の形式にして、時間は内外兩部の感性の形式あるが、空間は事物をして吾人の外に成立し、所々方々に排列する様になさしむ。空間時間が先天に存在することは、二様に辨明すべし。一は直接にして形而上辨明と稱し、事件其自らに付て討究すること、二は間接にして超絶的辨明と稱し、其事件にして先天にあらざれば尤も確實なる理學も消滅に歸すべしと斷定するよとなり。

第一篇超絶的

形而上辨明にては初に空間時間の先天に出づるを説き、次に二者が感性に屬して悟性にあらざるを説く。先天に出づるは明白の事にして、四方を眺め内外を悟るは、既に空間を覺るに依り、前後を察し、遲速を談するは、既に空間を覺ふるに依るあり。思へよ(一)机や書物に觸れて空間の觀念をさすに非ずして、空間の觀念ありて後ち、机や書物あるを覺知し得るなり。器物にして長なく、幅なく、厚なければ、何に由て其器物たるを辨すべけんや。尤も空間の觀念ありとて、外物に接せざれば存在を知る能はざれど、是れ猶ほ眼あるも、物品に對せざれば視力あるを知る能はざる若きのみ。(二)物躰は総べて虚無に爲ると考へらるも、空間は決して思想外に放棄すべからず。(三)何等の事物も界限を有せざる無ければ、空

間は無邊無限なりと認めざるを得ず。四空間は宇宙に遍滿して一躰を成し、種々に差別することあるも、均しく廣大無邊の空間に屬すと爲さざる能はず。斯く空間は事物と相違するを以て、事物の經驗より來る杯とは思も寄らざることなり。時間の時の經驗を離るゝと、亦之に准して推知すべし。然ればとて空間時間は矢張り感覺に屬せざる能はずと云ふは、悟性に屬するには、彼れ是れと特別の總念を作らざるを得ざるに、二者共に無限に連續して、甲の空間とか、乙の空間とか、丁の時間とか、戊の時間とか、判然と分離するに由なきに依るあり。超絶的辨明にては尤も確實なる理學として純正數學を取るが、純正數學は何に基くかと云ふに、空間時間に基くに外ならず。而して此學は必然にして普く應用せ

らるゝ、勿論なるが、必然にして普く應用せらるゝは、經驗より起らずして、先天に表はるゝなれば、空間時間の經驗より起らずして、先天に表はるゝことは、疑を要せざるあり。然れども此の空間時間の感覺は、客觀即ち外物の關係にあらずして、單に主觀の形式に過ぎざれば、如何なる感覺も多少主觀の原素を混せざるを得ずして、事に對し、物に接し、之を見、之を聞くも、其事物の眞性を表すと爲す無く、唯だ其事物が空間時間といふ主觀の形式に捲き込まれ、一種異様の状態を顯はすと爲すべきなり。是れ即ち吾人の知る所、現象に止りて、實體に及ばずとし、經驗的に正確を信して、超絶的に疑惑を免れずとする所以なり。

(超絶分解法)第二の應答は超絶論理學に在るが、此學は超絶

第四部批判法哲學

分解法と超絶辨證法とに分別するなり。超絶分解法は先づ純正の総念を發見することを務む。夫のアリストートルは早く此に見る所ありて、若干の範疇を數へ上げたれども、經驗上に掲載せしのみにて、常に一定の理法に由らざるのみならず、空間時間をも包括したるを以て、擾々として紛亂錯雜するの弊あるあり。純正の総念を枚擧するには、是非とも一の原理に基かざるを得ずして、之に基かんには論法的の斷定を察知するに若くなきなり。論法的の斷定を悉く列擧すれば、悟性に屬する純粹の総念を悉く辨知するを得べし。而して論法にては斷定に四種ありとし。從ひて純粹の総念即ち所謂範疇にも四種ありとす。比較すれば左の如し。

〔單稱的 此甲は乙なり〕

單一

第一篇超絶的

分量	特稱的	或	甲は乙なり	衆多
全稱的	諸	甲は乙なり	總計	
肯定的	甲は乙あり	實在		
否定的	甲は乙にあらす	虛無		
無限的	甲は非乙なり	制限		
合式的	甲は乙あり	本体及屬性		
約結的	甲が乙あれば丙は丁なり	原因及結果		
離接的	甲は乙若くは丙なり	相開(動及反動)		
未決的	甲は乙ならん	可能及不可能		
實說的	甲は乙あり	存在及不存在		
様式	甲は乙あり	必然及必不然		
分明的	甲は乙からざるべからず	制定するを		

以上十二の範疇よりして、諸般の先天の原理を制定するを

得るあり。此範疇は固より先天に出づるを以て、次きの二事を明かにす。曰く此等は必然にして、普く應用せらるゝを得ると。曰く此等は形式に過ぎざるを以て、感覺の爲めに充足せらるゝを要すと。而して感覺的の事物と純粹の總念と合併するの摸様は、大に注目すべきことなりとす。若し二者にして本性を同くすれば、直に合併するを得べきなれども、差異の存する、黑白より甚だしきを以て、媒介かくては到底一致和合する能はずして、其媒介なるものは、一方に於て感覺的の事物に類し、又一方に於て純粹の總念に似たる質を有せざるを得ざるべし。然る如き媒介は、只だ空間と時間とにして、殊に時間を可となすなり。時間は先天に著はれて範疇に順應すると全様に、万物を囊括して感覺に整合し、以て双

方を自由に結合するより、名けて超絶的の連結とすることあり。(二)時間が分量と連結し得るは、其連続して一に一を加はへ更に一を加はへ漸次に數へゆくに依るあり、其連続を最初に止むれば單一に應し、何程か續くれば衆多に應し、無限に續くべしとせば總計に應するなり。(三)時間が形質と連結し得るは、其資料の充足すると充足せざるに依るなり。感覺にて充足せらるれば實在に應し、感覺にて充足せられざれば虚無に應するなり。(三)時間が關係と連結し得るは、其順序を顯はすに依るあり。何事にても關係を察せんとせば、必ず一定の時間を感じざるべからず。時間に於て永く實在を表すれば本体に應し、次第に連續すれば原因に應す。一物の状情と他物の状情と共に發出し居れば相關に應するな

第四部批判法の哲學

り。四時間が様式と連結するは、其事物と一致するに異同あるに依るなり。時間一般に一致すれば可能に應し、時間の一部分が一致すれば存在に應し、時間の總体が一致すれば、必然に應するなり。

範疇と連結とにて、感覺より來る諸般の現象を統轄し得るが、統轄するに一定の規則ありとせざるなり。四種の範疇に准して、四様ありとす。(二)凡そ感覺は外延的分量を有す。何等の事物にても、部分全体の差別を立つる能はざる莫くして、差別を立つる能はざる時は、思想中に包容するを得ざるに似たり。時間は視る可らず、聽く可らざる者あれども、其經過を考へんとするには、是非とも一分二分三分とか、一日二日三日とか、一年二年三年とか、順次に計算しゆかざる能は

第一篇超絶的

ず。幾何學に二點間に一直線をを引くと云ひ、二直線にて一面を圍む可らずと云ふも、斯く外延的に考察せし上にて辨明するに外ならず。事皆な然り。此則を名けて感覺の單則と爲す。(三)凡そ感覺の資料たるべき者は、内包的的分量即ち度を有す。熱といひ、寒といひ、反對の意味を呈出するは何ぞや。熱實に存在すとすれば、酷烈の熱なるか、微弱の熱あるか、何にせよ多少の差あるや、必せり。微弱の熱を次第に滅却すれば冷となり、大に滅却すれば極寒となり、遂に毫も熱を留めざる様に覺ふるが、熱と寒との違ひを尋ねれば、唯だ熱が多きか少きかに過ぎず。白といひ、墨といひ、堅といひ、軟といひ、剛といひ、怯といひ、賢といひ、愚といふも、度を異にするのみにして、百度若くは五十度若くは零度と稱するが如きなり。

第四部批判哲學

有り無しは多少に依ると知るべし。此則を名けて知覺の豫料と爲す。(三)經驗は知覺必然の連絡を顯はすより成るなり。一定の秩序あらざれば、何をか思考するを得ん。抑も時間に恆久、連續、俱有の三狀あれば、時間に顯出する諸物件は、素より此三様に依從せざる能はざるべし。第一に云ふべし、何等の變更に於ても本躰の不變の性を有すと。物躰が轉變する如く考へらるゝは、轉變せざる所に對して言ふのみにして、轉變せざる所なければ、轉變の如何を考ふべからざるなり。第二に云ふべし、何等の變更も原因結果の法則に従ふと。二個の物件連續するも、一を原因とし、一を結果とせざれば、確實に連續といふ事を思考する能はず。而て連續かくして經驗ある筈なければ、原因結果の關係は、諸物成立の基礎を表

第一篇超絶的

するなり。第三に云ふべし、同時に顯出し居る物件は、充分に相關の有様ありと。甲乙同時に存在すれば、甲は乙を感化せんとし、乙は甲を感化せんとし、互に感化しあはんとす。地球月を引き、月地球を引くのみならず、地球や月に引れをる吾人が手を舉げ足を動かせば、幾分か地球并に月を動揺するなり。以上三則を名けて經驗の對比と爲す。(四)經驗の形式的狀情に一致するは、可能にして、現象と爲り得べきとあり。經驗の資料的狀情に一致するは、現實にして、正に現象たることあり。經驗の普遍の狀情にて現實の性を顯はせるは、必然なり。是れ皆な事物の本質に關せずして、事物と認識力との干係の摸様を表發す。山あり、川あり、花あり、人なり、同様の物にてもいつも然らん、然り然らざるべからずと三通に思考

第四部批判法哲

するを得べし。此則を名けて經驗的思想の公準と爲す。此等
 範疇の諸則は總べて先天に存在して、形而上學の基礎たる
 べきものなり。而も是れ經驗的事物にのみ適用すべくし
 て、經驗外に出で、事物の眞体に合同すべからず。彼物を視て範
 疇にあてはめ、此件を聽て範疇にあてはめ、前後左右盡く範
 疇にあてはむるも、斯く刺衝し來る者は、空間時間に顯はる
 、雜多の感覺に外ならざれば、何程眞奥を穿たんとするも、
 詮なきなり。先天の範疇なりとて、感覺を混せざれば空虚同
 様にして何の益もなければ、先天たりと云ふが爲め、動もす
 れば感覺の範圍外に馳突せんとすることあり。然れども此
 に於て危險猶ほ未だ甚しからず。別に古來哲學士の喜て使
 用せし所に拘らず、空理妄想に陥り易くして、最も危險の恐

ある者の存するあり。之を辨明して從來の弊を一洗するは、
 超絶證辨法の目的なり。

第一 超絶 的
 (超絶辨證法)譬へて言はゞ、超絶分解法に於て説明したる所
 は、常に大平を歌ふべき島國あり。山川の形狀歷々として指
 定すべし。但だ海上を望めば雲霧漠々、山嶽の如きもの、島嶼
 の如きもの、處々に顯はれ、船舶を造り、順風に乗して進行す
 れば、水烟奔騰し、波濤激衝するあるのみ、斯く人目を迷はす
 は、理性の然らしむる所なり。超絶辨證法にては、先づ悟性と
 理性とを區別し、悟性に範疇ある如く、理性に觀念ありて、悟
 性が範疇より單則を生出する如く、理性は觀念より原理を
 生出すとするなり。理性の第一義とする所は、有碍に對して、
 無碍を發見するにあるが、實は人性の癖として、個々特別の

第四部批判法の哲學

事件に満足せず、悟性にて種々に統合し得たるより、更に進て究竟の大道理を覺知せんとするに基けるなり。之が爲め著大の虚偽を生ず。原理をば推測式に歸すとすれば、虚偽の由て生ずる所も合式約結離接の三段に別るべし。二合式にては、諸丙は乙なり、諸甲は丙なり、故に諸甲は乙あり、と云ふ式を幾度もくり返へし、常に主位に留まりて賓位と爲らざる者を認めんとするなり。認め得れば固より自主自在の自己たるべし。三約結にては、甲が乙なれば丙は丁あり、甲は乙あり、故に丙は丁なり、と云ふ式を幾度もくり返へし、常に原因に留まりて結果と爲らざる者を認めんとするなり。認め得れば固より萬物覆載の世界たるべし。三離接にては甲は乙若くは丙なり、甲は乙ならず、故に甲は丙なり、と云ふ式を

第一篇超絶的

幾度もくり返へし、常に全体に留まりて部分と爲らざる者を認めんとするなり。認め得れば固より全智全能の上帝たるべし。第一は合理心意學の根本となり、第二は合理世界學の根本となり、第三は合理神道學の根本とあるなり。合理心意學にては、自己即ち所謂靈魂を説き、靈魂は物跡に關せずして、永久絶滅するをかしと爲すなり。是れ不當の言と謂ふべし。斯の如きことは素と我が想ふといふより生ずるが、我が想ふは一の認識に過ぎずして、絶えて總念の部類に屬せざれば、何はと我の存在を確めんとするも、自ら自身の面相を視んとするど一般、毫末の結果を獲ざるべし。若し我が我を想ふとして、強て我の存在を想はんとすれば、其想はるゝ我が果して實際に存在するときには、必ず一度は感覺

第四部批判法の哲學

を通過し來らざる能はざる筈あるに、我が感覺を通過する杯とは思ひも寄らざる事なれば、私の別段獨立して成立せざるは、疑を要せざるなり。靈魂を不滅とする類は、總て無根の妄語とすべし。要するに合理心意學は新智識を開發するの力なくして、徒だ人をして考究に界限を置き、唯物論の甚きにも至らず、精神論の極端にも走らしめざるの益あれば足れりとす。

合理世界學は範疇の順序を追ひ、分量上にて世界の總計を考へ、形質上にて物体の分性を考へ、關係上にて原因の連續を考へ、様式上にて現象の依從を考ふるあり。然るに一々背戻の理論と供ひ、甲説を確乎たる正理と認むると同時に、之が駁撃に當るべき乙説をも確乎たる正理と認めざる能は

第一篇 超絶的

ざる様あり。一甲は曰ふ、世界は時間に於て元始あり、空間に於て邊際ありと。乙は曰ふ、世界は時間に於て元始なく、空間に於て邊際なしと。二甲は曰ふ、何等の事物も單獨の多く集合するより成り、世界には單獨若くは單獨の集合のほか存在すべきものなしと。乙は曰ふ、何等の事物も單獨の集合より成らずと。世界には曾て單獨なるものゝ存在するなしと。三甲は曰ふ、世界の現象を興起するは、機制的の原因のみにあらずして、別に自由意志の原因といふ者の存するありと。乙は云ふ、諸事機制的の原因を有す。自由意志の原因といふ者決して存せずと。四甲は曰ふ、世界には其一部若くは其原因として必然なる者ありと。乙は曰ふ、世界には其一部として、其原因としても、必然なる者あらずと。甲を是とすれ

第四部批判法哲學

ば、乙をも是とすべく、乙を是とれば、甲をも是とすべく、二者互に衝突し、互に矛盾して、消滅虚無に歸し了らん。甲にも理あり、乙にも理あれど、孰れを眞實と決しがたくして、愈々論辨すれば、愈々分離し、遂に水掛け論に終るべき例を擧げん。甲曰はく、世界は時間に於て元始あり。若し元始なければ今年若くは昨年若くは何れかの世代に在て既に無限の變動を經過し了らざる可らず、然るに無限の變動は經過し了る筈なくして、經過し了れば限を有するを以て、無限の性を失ふなり。故に世界は是非とも元始ありとせざる得ずと。乙曰はく、世界は時間に於て元始なし。元始の前に何様の事物も成立せずして、何様の事物も成立せざれば、元始が有るや無しやをも定めがたし。元始に先て虚無ありとするは、元始な

第一篇超絶的

しと謂ふに同じ。故に世界には決して元始ありとするを得ずと。甲曰はく世界は空間に於て邊際あり。若し邊際なければ、世界全体を無限とせざるべからざるが、何事も覺知するには、一部一部と限ある間を尋ねゆくを則とすれば、無限の世界を覺知する迄には尋ね廻ること無限あらざる能はずして、限なく尋ね廻るとは到底爲す可らざる事なり。町を知り、縣を知り、諸道を知り、而して後ち邦土全体を知り得るが、世界にして無限なれば、斯く漸次に知ることとも無限なるや必せり。是豈に爲し能ふ事ならんや。故に世界に邊際あるは疑ふべからずと。乙曰く世界は空間に於て邊際なし。若し邊際あれば、世界は空虚の内に懸るととなるが、空虚に對して邊際ありと謂ふは、邊際なしと謂ふに異ならざるべし。故に

第四部批分法の學者

世界には邊際なしと。甲曰はく、世界の現象を興起するは、機制的の原因のみにあらずして、別に自由意志の原因といふ者の存するあり。若し機制的の原因のみならば、原因に原因あり、其原因に復た原因あり、其原因の原因に復た原因ありと、遂に究極すべからず。然るに何事にも原因ありとし、而も世界究竟の原因は孰れに在りとも定めがたしとすれば、世界は單に機制的の原因に依らざるや明かなり。千萬の盲人が手を引きあひて進行するに寸分も行列を亂すことなれば、固より眼あきが補助し居ると考へざるを得ざれど、機制的の原因のみを信する者は、眼あきなどの補助なく、無数の盲人相寄りて明を生すと言ふなるべしと。乙曰はく、諸事機制的の原因を有す。自由意志の原因といふ者決して存せ

第一篇 超絶的

ず。何等の原因も前に原因なければ發動せざる譯にして、世界究竟の原因を以て他の原因に先だゝれずとする時は、無論に存在すまじき事なりとす。自由意志の原因をして全く自由たらしめば、原因の稱を下たさゝるも可あるべきに、機制的の原因を統轄すると爲し、機制的と同様にして自由の性を失ふが如くならしむるは、自家撞着の言なり。自由意志の原因何故に存するかと問ふに、機制的の原因に最先の活動力なきが故に之を運轉せしめんが爲めありと言ふに外ならず。最先の原因なりとて、後件を起すべき理ありて後件を起せば、少しも機制的の原因に異ならず。自由たるところ何處にあらんや。世間には機制的のみありて、自由意志あらざるなりと。

第四部批判の哲學者

合理神道學は上帝を説明するが、要するに三種の理論に基くなり。第一は實跡學的の理論なり。曰く完全なる者は存在せざる可らずして、存在する能はざる者は、完全と稱し難ければ、上帝の如き完全なる者は、固より存在せざるへからずと。デカルト此説を引用して言へらく、三角合して二直角とならざるものは三角となすべからざるが如く、虚に存在するものは斷して純全とあす能はざるが故に、元來純全ある者は眞に存在せざるを得ず。彼の上帝は元來純全なるもの、謂なり。焉そ眞に存在せざるを得んやと。然るに是れ寔に論破し易し。存在する、存在せざるは、總念に於て何の利益もあし。金百万圓ありと云ふも、金百万圓なしと云ふも、百万圓といふ事には毫も差違なくして、實際の差違は我が手の中

第一篇超絶的

に在りや無しといふ所に存するのみ。充分に考へ得たればとて、豈に其眞實を證するを得んや。第二は世界學的の理論なり。曰く世には盛衰榮枯ありて、果敢なき事のみ多ければ、必ず之を總括する大能力なかるべからず。制限ある者ばかり顯出しをる様あるが、制限ある者ばかり有りとは思考すべからざれば、制せられず限られざる萬能の上帝あるは、當然の事なるべしと。是亦た正理あるものに非ず。世間乱雜なりとて、何を必しも純良の上帝あるを斷すべけんや。制限ある者ばかりにて不都合ありとも、何ぞ必しも別に無限の能力あるを保すべけんや。皆な假空の妄想より發出せしのみ、第三は預匠的の理論なり。曰く天地間巧妙なる規律あり。日月星辰の整然として運行する、山嶽河海の森然として

第四部批判の哲學者

成立する、實に感歎するに餘あり。上帝の造作する所に非ずして、豈能く此の如くならんや。是れ古來言ひ傳ふる所に於て、理もあり趣味もある事なれど、眞正の論法に照らせば、容易に挫折せざるを得ず、世界の宏壯なる形狀より上帝を考ふるに、上帝を以て至大の建築家とするものにして、之を以て材料の物体を創造すると爲すにあらざる。大工は木を切り、釘を打ち、莊嚴なる宮殿を作るも、木や鉄は何様にしても製出する能はず。世界の預匠のみより推せば、上帝も或は之に類するあらんか。且つ世界の構造は巧妙は則ち巧妙なれど、巧妙を究極して全く完全無缺の域に達したるかば、斷言すべからざる所にして、隨て之が製造者あるものも、果して至善至智なるかは、亦た斷言すべからざる所なり。又假令構

第一篇超絶的

造を完全無缺とするも、何を以て製造者の一個の上帝のみにして、他に同類なきを判定すべけんや。推しつめて辨難すれば、預匠的の理論は維持に苦しみて、世界學的の理論に譲らんとし、世界學的の理論亦た維持に苦しみて、實體學的の理論に譲らんとし、四分五裂して歸する所なきに至らんとす。斯く合理神道學の上帝論が破滅に屬する如くあれど、人をして宇宙を一躰と見做し、六合の事物個々別々に獨立せずして、唯一の大原因に隨從する様に推考し得せしむるの益あり。上帝の存在は證明しがたきに拘らず、上帝あり、上帝の萬有を主宰するあり、と假定し置けば、寰宇全般の秩序を考ふるに大なる便利あれば、強ち棄却すべき物件にもあらず。唯だ便利は便利なりとし、知る可らざるは知る可らず。

第四部批判法の哲學

し、考察の區域を判然たらしむれば可なりとす。理性の觀念より合理心意學、合理世界學、合理神道學の諸原理を顯はせるも、皆な假空の妄想に基きたることは、前に陳述せし如くなるが、此等の諸原理が眞に無用無益のものならば、別段に顯れ出でまじき筈あるに、著大の勢力を以て表出し來り、種々雜多の議論を包括し去らんとする傾向あるは訝かしき事にあらずや。實は前條にも少く辨せし通り、假空の妄想に基くも、議論を整齊するの便益あるなり。合理心意學に説く處の靈魂は、實理上甚だ不都合なるにせよ、吾人が心意の作用を解説するとき、靈魂が直に活動し居るゝの様
 様に考へざれば、困難を感じる尠少なからざるべし。合理世界學に説く處の原因の類も、實理上甚だ不都合なるにせよ、宇

第一篇超絶的

宙れ現象を解説するとき、原因が絶えず連続し居るかの様に考へざれば、困難を感じる尠少なからざるべし。合理神道學に説く處の上帝も、實理上甚だ不都合なるにせよ、乾坤の躰制を解説するとき、上帝が萬物を統轄し居るかの様に考へざれば、困難を感じる尠少なからざるべし。必竟するに妄想は妄想として排斥するも、多年の經驗にて收得せる許多の知識を整合するの益あらば、心意學あり、世界學なり、神道學あり、若干の改正を加はへて永く保存しおくとも、不利を來たす者あるべし。且つ此等の觀念は倫理の如き實用的の事件に益ある莫大ありとす。自由意志、靈魂不滅、上帝存在などは知識開發の點に於て何の効能もなければ、徳義を養成するに須臾も欠くべからざるのみならず、實際徳義の感情に、厚

第四部 批判法の哲學

きものは放棄する能はざるに似たり。純粹の理論は一寸も曖昧なる事情を許容せざるも、實際活用の範圍は悠々寛々として優美の資性を備ふると、多くして且つ大なり。純粹道理批判茲に去て、實踐道理批判將に出てんとす。

第三章 道理實踐批判

實踐道理批判は純粹道理批判と殆ど全く反對の地位に立ち、彼に破壊する所は此に保存し、此に主張する所は彼に非難する有様あり。蓋し主旨を異にする者にして、純粹道理批判にては道理が先天に事物に關涉し得るかを尋ね、實踐道理批判にては道理が先天に意志を限定し得るかを尋ね、事物に就ては感覺を主とし、意志に就ては原理總念を主とする爲め、自ら順序を顛倒せざる能ざるあり。純粹の理論に於て

第一篇 超絶的

は、事物の本性に進めば漠然として自失するの狀あれど、實用の思想に於ては、始より斷乎として顯はれ出で、自由意志、靈魂不滅、上帝存在等を憑信するに及ばんとす。道理が先天に意志を限定し得るは無論の事あれど、吾人の行爲が大抵喜怒哀樂等の情に因て興發する様に見ゆるより、先天の模様を覺知せんとするも得べからざることあり。之が爲め實踐道理批判を兩分し、分解法に於て意志が感情に依頼せずして直ちに道理の制裁を待つまどあるを陳べ、辨證法に於て道理の支配と感情の拘束と相ひ干係する狀を辨せんとす。

(分解法) 分解法は先づ所謂る道德の規制を以て意志が道理に依從するの證となす。道德は情慾の外に立ち、快樂あるも

第四部 批判の哲學

溺れざらしめ、苦痛あるも堪へ忍ばしむる力あり。善のため爲す可しとの命を受くれば、是非とも爲さざる能はざるが、其爲す可しとの命は、快樂に反して出づることもあれば、感覺に依らざると明かにして、一身の説に逆ふて起ることもあれば、各自特別の狹隘なる道理に關せざること疑わし。實に道徳は普通の道理に基くものにして、普通の道理が意志の方向を定むるより起れど、意志の方向が普通の道理に定めらるゝ時は、則ち意志と普通の道理と一致し居り、意志自ら決行して顯はるゝに異ならざるなり。自由意志は素より争はれざる事あるべし。しかも自由意志の働作を熟知せんには、意志尋常の發動を觀察せざるへからず。抑も通例は苦を避け樂を求め、苦と苦を較べて大苦を逃がれ、樂と樂を較

第一節 超絶的

べて大樂を受けんとし、事々物々苦樂を標準として判断しをるが如し。苦や、樂や、死生を決するほどの勢あるに拘らず、毎に轉變して一定せざるの恐あり。我が苦とする所、人に於て樂となり、人の苦とする所、我に於て樂となり、我が大愉快なりとして歡喜するものも、人に在ては左まで快樂の情を喚起するなく、人が非常の苦難として憂愁するものも、我に在て何等の配慮を煩はさざることあり。加ふるに昔日の樂今日の苦となり、今日の苦、後日の樂となり、何を以て快樂とし、何を以て苦痛とするやも、測られざる様なれば、到底苦樂の二件に依て人間萬般の行爲を決定するものと斷言する能はざるべし。感覺教を奉し、快樂のほか主とあすべき所なき如く思惟する者は、甚しき誤謬に陥りしに非ずや。然れど

第四部批判法の哲學

も苦樂の意志を刺衝すること弱小ならず。意志は純粹の道理にて支配せらるゝも、苦樂と伴はざれば果して支配せられざるや否をも識別する能はざれば、苦と樂とは充分に注意するを要す。唯だ苦なり、樂あり、人々特別のものを取らずして、普通の道理を并合し得べきものを取らんこと肝要の點あり。故に道義最上の原理に曰ふ、自己の行爲をして普通、の理法に適合する如くに働作せよと、乃ち苦を去り、樂に就くも、一身偏頗の情慾を抑へて、諸人が服従すべき普通の道理に依從せざるを得ざるなり、若し何物が意志をして道義の法に隨はしむるかど問はるれば、道義の法を尊重するの一事と云はんのみ。強て尊重せざる可らざることならば、固より一種の苦痛たるべけれど、其尊重は已れ自ら爲すこと

第一篇 超絶的

ろにして、毫も他に強制せらるゝ無ければ、寧ろ快樂の稱を下すを至當とす。但し自ら尊重の念を發して、自ら尊重の狀を顯はすは、快樂たるに相違なきも、世間一般の人々が道徳に對して斯の如くあらんとは、決して思考すべからざる所なれば、悲くも道徳を歡喜するといふ事は、單に想像のみに留め置かざるを得ず。誰か喜て人の危急に赴くか。誰か喜て資財を窮民に投與するか。當代に在て道徳に隨從せんと欲せば、是非とも多少の苦痛に遭遇せざる能はざるなり。辨證法辨證法に轉し、無上の善即ち至善は何なるやを尋ねんか。若し至善を目して諸種の善の基本たりとせば、直ちに徳なりと答ふべきのみ。而も有情の人類は毎に幸福を希求するを以て、徳のみにては至善と稱し得ざるに似たり。至善

第四部批判法の哲學

は須く最大の徳と最大の幸福とを并合せる者を爲すべし。然らば最大の徳と最大の幸福と何等の關係を有するか。并合するは分解的なるか、總合的あるか。古人は大抵分解的に主張し、ストア派は幸福を以て徳に屬すとなし、自己の徳を認知する是れ幸福ありと云ひ、エピキュラス派は徳を以て幸福に屬すとなし、幸福を獲るの道を認知する是れ徳なりと云へり。然れども徳と幸福とは、元來性質を異にするが故に何様にしても徳を幸福に屬し、若くは幸福を徳に屬するわけにもかざるべし。依て并合は必ず總合的ならざるべからざる様あるが、總合的ならば一を原因とし、一を結果とし、徳ありて幸福あり、幸福ありて徳ありとする外なし。而も徳と幸福とは原因結果を爲すと云ふと同時に、徳と幸福とは原

第一篇超絶的

因結果を爲さずとも言ふを得。實際徳を修むるも幸福を受けずして、幸福を有するも徳を欠くこと尠からず。兎は云へ原因結果の關係は拋棄すべきものに非ずして、現世に於て其關係を乱すやうなるも、虚靈の世界、即ち視聽等の感覺に依らずして心神を活動する不可思議の境界に於て充分に之を保持すと爲す。虚靈の世界にて至善を行ひ、虚靈の世界にて最大の徳と最大の幸福と貳つながら具備すべし。但し最大の徳を有せんには、靈魂不滅を要し、最大の幸福を有せんには上帝存在を要す。一人類は甚だ不完全なる者にして漸次に徳を養ふは勿論なるべけれど、徳を積みて最大の徳に達するには、無限の時間を必須とするが、既に最大の徳の目的とすべきあれば、無限の時間に堪ふべき靈魂なかるべ

第四部批判法の哲學

からず。靈魂何ぞ滅亡せんや。(二)至善には最大の幸福あり。最大の幸福とは欲する所として得ざるなく、願ふ所として遂げざるなき事とすれば、到底人力の能くすべき者に非ずとす。徳義に於て少しも欠乏するなく、而も居常絶大の快樂を受けんことは、聖人も難しとするところにして、凡夫の夢裡にも企及し得ざるものなり。上帝なかりせば、何に由て最大の幸福を享くるを得んや。上帝は全智全能にして人類の志望を熟知し居れば、必ず得がたき快樂、受けがたき幸福を授くることあらん。

斯く自由意志は道德の成立より證せられ、靈魂不滅は最大の徳より證せられ、上帝存在は最大の幸福より證せられ、曾て純粹道理批判に於て消滅し了りたる件々、此に至て瞭然

第一篇 超絶的

として現出する事と爲れり。但し瞭然として現出したりと
は言へ、道理上どこまでも受け合ふべきものに非ずして、單
に實用上須臾も避くるを得ざる物件なりとなすべきのみ。
自由意志果して非難す可らざるか。其的實あることを證す
る能はざるなり。靈魂不滅果して非難す可らざるか。其的實
なることを證する能はざるなり。上帝存在果して非難す可
らざるか。其的實なることを證する能はざるなり。其的實なる
ことは證すべからざるも、而も判然として顯はれ、毫も非難
を容れられざるは、即ち實踐道理の純粹道理に異なる所な
り。曖昧に聞ゆるも、曖昧の區域明晰あれば、道理を錯亂する
の憂ひなし。荒唐に類するも、荒唐の區域井然たれば、智識を
紛擾するの恐なし。考察の致らざるところ、亦た妙趣なきに